
ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

【Zコード】

Z0606X

【作者名】

くま太郎

【あらすじ】

財津功才、高校一年生。

あだ名はザコ。

おもしろいという理由だけで、魔法と剣の世界オーディヌスに召還される。

これは小技を得意とする普通の高校生が異世界で、成長していくかもしれない物語。

「登場する（前書き）

初オリジナルの作品となります。
更新の日時は全く未定です。

ザコ登場する

平和だ、いや幸せだ。

学校は男子校。

当然、彼女はなし。
できる予定もなし。

ついでに、才能や見た目も、人並み以下。

でも今、俺は幸せなんだ。

「おーいザコ。山田先輩が呼んでんぞ」

「わーった。今行く」

「ちーつす。山田さん何かよいつすか?」

「おー、ザコ良く来たな。こいつがバイト先の後輩の財津功才通称ザコだ。ザコについてらが、お前の幼なじみの話を聞きたいんだよ」

またか、俺が知らない人に興味を持たれるのは確実に幼なじみ絡みだ。

「いいっすけど、どっちの幼なじみですか?」

「なつなつ、お前さ。美星学園の三条小百合さんと夏海唯ちゃんと幼なじみって本当か?」

三条小百合

黒髪の長髪、白い肌に日本人形並みに整つた顔。

性格はおしとやかで、生け花や茶道を好むリアル大和撫子。

夏海唯
なみゆい

元気の固まりのスポーツ少女。

誰にも分け隔て無く接する明るい性格。
それでいてモデルが勤まる美貌をもつ。

「そうですよ。2人共、俺の幼なじみですよ」

この後の答えは、決まっている。
そしてその後の答えも。

「いーよなー。うりやましい、あんな幼なじみがいるんなてよ」

「そうっすか？ついでに風雅院隼人と鷹丘勇牙も幼なじみなんすよ」

風雅院隼人
ふうがいんはやと

美星学園野球部の四番でエース。

頭脳も天才、そして綺麗系なイケメン。

鷹丘勇牙
たかおかゆうが

同じく美星学園の生徒。

ついでに暴走族マッドエンペラー総長。

男氣溢れる性格で、メンバーに絶対的な信頼をもたれている。

「こいつはワイルド系イケメン。

ちなみに4人共も俺と同い年の高1。

「こいつの周りは美少女、イケメンばかり。しかも揃いも揃つて多芸多才。それでこいつについたあだ名が財津巧才を縮めたザコつて訳だ。悪い奴じやないから可愛がつてやってくれや」

山田先輩が、ニヤニヤしながら俺を指差した。

山田先輩の友達は、生暖かい目で俺を見ている。

確実に同情の目だ。それには、なれてるし同情ならむしろありがたい。

ガキの頃は、何も気にせずあいつらと遊べていた。

小学校にあがつて努力では埋めれない才能の差を知る。

周りの大人からは、いつも5人一緒に君だけ努力をしていなんといんじゃないかと、良く言われた。

努力ならあいつらの数倍努力をしていた。

勉強もスポーツも。

中学になると、あいつらに嫉妬した奴が俺に八つ当たりをしてきた。やれ三条に振られたのはお前のせいだと、夏海に嫌われたのお前が悪口を言つたんだるうとか。

挙げ句の果てに、風雅院に女を盗られたとか、鷹丘にケンカをうつて負けたのが腹がたつからと俺に八つ当たりをしてくる奴もいた。

高校になつて、あいつらと離れた俺には、美少女の幼なじみの目の保養や、イケメンや暴走族リーダーの幼なじみの恩恵はなくなつた

が、比較をされないで済む幸せが待つていくれた。

コンビニのバイトを終えて、帰る途中に女の子の叫び声が聞こえた。普段なら知らないフリをする、しかし叫び声の主は幼なじみの夏海唯に違いない。

無視をしたら、小百合に泣かれ隼人に嫌味タップリに叱られ、勇牙にしばかれる。

何より唯が、傷つく姿を見たくはない。

あいつらから離れたのは、俺の勝手でしかないんだから。

今俺が持っているのは、飲みかけの缶コーヒーと通学カバンぐらい。

(武器になる訳ないよな)

声のした方に走っていくと、唯が男に絡まれていた。周囲を雑居ビルに囲まれて、逃げ場がないらしい。

男は180以上ある筋肉質でスキンヘッド。できる事なら、一生関わりたくない人物。

ケンカじゃ絶対に勝つ自信はない。

でもこの場を切り抜ける自信はある。

俺は飲みかけの缶コーヒーを男の頭目掛けて投げつけた。

カツーンと良い音を立てて、缶コーヒーは音の頭にクリーンヒット。

「良かつたじゃねえか、ハゲに髪が生えたぜ」

男の頭からは、コーヒーが滴り落ちていた。

「功才つ！！」

唯、できたら名前を読んで欲しくなかつたなー。

「唯、ここのは俺が何とかする。勇牙があの公園で集会をしているから逃げろつ」

逃げて、勇牙や暴走族のお友達に俺を助ける様に言つてくれ。

小馬鹿にされたと思つたらしく、男は唯から俺に標的を変えて襲いかかってきた。

チヨコマカ逃げて、唯の逃走時間を稼ぐ。

稼ぐつて…さすがは部活少女、ちゅうちょなく逃げて既に姿がない。

なら俺が取る行動は1つ。

雑居ビルの隙間から逃走をはかるのみ。

あの体なら隙間に入つてこれないだろつし、隙間を抜ければ駅前通りだ。

思つた通り、男は追つて来れなかつたが、何故か隙間は延々と続いていた。

どれ位歩いたんだろう。

確実に雑居ビル以上は歩いている。

でも、後ろを振り向く勇気なんて俺にある訳がない。

その後も歩いていくと、ようやく明かりが見えてきた。

ここを抜けたら駅前通りの筈なんだが。

そこはレンガ造りの部屋で、ソファーに男が腰を掛けていた。

男は俺を見つけると、ニヤリとと笑いこう言った。

「ようじや。魔法と剣の世界、オーディヌスになに、この状況は？」

ザ「登場する（後書き）

幼なじみ4人は、しばらく、でてきません。

が「ハルヒシニ露叶（はるかね）」

2話目です。

ガーナと隣じて歸仏

雑居ビルの隙間を抜けたら、レンガ造り部屋だつた。

これは夢か？

そうだ、俺は、あのでかい奴にしばかれて氣絶をして夢を見てるに違いない。

「夢じゃないですよ、財津功才君。この世界で夢なんて見ていたら天国に行っちゃいまさよ」

俺は、何とも嫌な注意をしてくれた男を改めて見てみる。

年は、50才くらいだろうか。

第一印象は、怪しい。

第一印象も、怪しい。

どこままでいつも怪しい。

体型は、細いが筋肉質。

顔は、渋めで俳優をしていてもおかしくないだらう。

モミアゲから続いているヒゲが渋さを増している。

しかし、真っ赤なシルクハットに真っ赤ジャッケット、ズボンも靴も赤一色だ。

（趣味わりー。今時芸人にもあんな格好する奴いなって）

「趣味が悪いなんて、失礼ですね。私は魔導士ですし、きちんとシャツは白ですよ。魔導士を見て戸惑うのはいけないんですよ」

「はあ…すいません」

俺の危険回避レーダーが、関わるな危険と全力で注意を促してくれる。

「はー、魔導と戸惑うをかけた馴熟を無視するなんて立派な紳士になれませんよ。まあ功才君には冒険者になつてもらうからいいんですけどね」

これが、俺と師匠のファーストコンタクトだった。

「何時までも、ボケッと突っ立っているんです。こいつに来て座つてゆつべつと話をしましょ」

(座つたら、こざつて時に逃げれないだらうが)

「心配しなくとも、何もしませんよ。それともう逃げませんよ」

「くつへ~どう言ひ事つすか?」

「だからこりはオーディヌス。功才君が住んでいた世界とは別世界なんですから」

「は? 別世界って?」

「言ひ方を変えると異世界ですね。ちなみに功才君を喰んだのは私、ロッキー・バルボアです。気軽にロッキ師匠と呼んで下さい」

「、感づ俺を無視して、話を進めていくロシキさん。

「貴男には、」（）で修行をした後に、オーディヌスで冒険者になつてもらいます」

「冒険者ですか？秘境の探検とかをしろと？」

「冒険者の仕事は、討伐・護衛・採取とかですね。その辺はギルドに聞いて下さい」

「討伐って、何を倒せと？」

「魔物や犯罪者とかですよ？頑張つて下さい」

「この親父は何をぬかしてるんだ。」

「お断りします。つーか無理ですよ。俺ケンカ弱いし」

「だ・か・ら修行をするんじゃないですか。私の話聞いてました？」

「聞いてたから拒否するんだって

「それなら俺じゃなくても、いいじゃないです。俺より強い奴なんて、いくらでもいますよ」

「貴男が良いんですよ。財津功才君、貴男はとても面白いですからね」

「それだけ？」

「強い人間、優れた人間は上を見たら限りがありません。でも貴男は面白い、貴男と言う小石を磨いてオーディヌスの荒れる大海原に投げ込んだらどうなるか見てみたいんですよ」

確実に砕けるか、海に沈むつて。

「もし、拒否したら？」

「元の世界に帰れないし、ここから放り出すだけですよ。いまの貴男じや魔物の餌になるのを確定ですけどね」

「うつ、何か特別な才能くれるんですか？筋力増強とか？」

「ないですよ。軽自動車しか運転した事がない人間が、いきなりF1を運転できる訳ないじゃないですか？」

(F1って、この人お疲れな人なんじゃないか?)

「本当に失礼ですね。私は貴男を召還するに辺り貴男の世界の事を色々学んだですよ」

ロツキさんの指差した先には、図鑑、小説、ビデオが積まれていた。当然、その中には種馬垂れ目ボクサーのビデオもある。

ザ・「ヒミツ」の師匠（後書き）

今の若い人は種馬垂れ目ボクサーをわかるんだろうか？
指摘、感想お待ちしております

ザハの修行（前書き）

じみーな展開です

ザ「」の修行

半ば強制的に、修行の日々は始まった。
でもこれがかなり地味。

ライトノベルみたいに、

「そんな簡単に魔法を使いこなせれるなんて」

そんな展開が俺にある訳なかった。

朝は、基礎体力作りから始まる。

この建物は8階層の塔らしく、その1階から8階までを、荷物を持ちながら、ひたらすら歩かせられた。

師匠曰わく

「『』の世界の移動手段は徒步が基本ですからね。当然、サバイバル道具を持ちながらの移動ですよ」

ちなみに今朝のロツキ師匠の服は、黄緑色バージョン。

疲れたから休憩をお願いしたら、魔法で強制回復させられて再開をさせられた。

次は武術の修行。

槍や剣でひたすら、人形を攻撃していく。

師匠の一言

「基本がない君が、技なんて無理ですよ。まずは武器の重さに慣れる。自由に扱える筋肉をつける。物を斬った時の衝撃にも慣れる。それが先です」

手の皮が、むけたと言つたらやつぱり回復させて再開。

次は座学。
座学で分かった事。

オーディヌスの国の殆どは、王政が敷かれているとの事。
つまりは身分制度が、きつちりしている。
俺の立場を聞くと

「ちゃんと市民にしてあげますよ。貴族に絡まれたら泣き寝入りだから気をつけて下さい」

師匠は、そう笑いながら教えてくれた。
いきなり貴族待遇は勘弁して欲しかつたから、まあ、これだけは感謝をしている。

俺は、ジユチームやセトレボーンな礼儀はできないし、ドロドロの権力闘争を防ぐ力も後ろ盾もねえーもん。

そして俺の世界との一番の違い、エルフやドーワフが存在する事。

「間違つても、亜人なんて言葉は使わないで下さい。彼らはプライドが高いですから。エルフの中には人を、猿人族なんて呼ぶ方もいますから」

ちなみに、猿人族の他に猫人族・犬人族など様々な種族がいるそうだ。

他民族の風習とかが、分からぬいうちは近づかない様にしておこう。
犬耳や肉球は魅力的だけども、猿人族と仲が悪いかもしれないから、君子危うきに近寄らずが一番だ。

魔法に関しては、さうに地味。

魔法は神聖魔法、精靈魔法、簡易魔法、特別魔法に分かれているらしい。

神聖魔法は、エルフに認めないと無理との事。

師匠からの一言。

「エルフは美しい者を評価しますから。まあ君は無理でしょ

言わなくも分かつてますよー。

美しい者好きって、聞いた時点で諦めました。

精靈魔法も、精靈に認めれないといけないらしい。

師匠からの説明

「精靈がどこにいるかって？それぞれの信仰神殿の奥に匿われていますよ。軟禁に近いかもしないんですけど。つまりその神殿に仕えて修行して才能がある者か多額の寄付金を拝つた者にのみチャンスがある訳です」

「俺には無理と？」

「神殿にいるのは、人の信仰を糧にしている一部の精靈ですからね。秘境とかにいけば強力な精靈がいますよ。行く間に死ぬ確率や会つたら襲われる確率の方が、半端じゃなく高いんですけどね」

うん、これも諦めよう。

今、俺が勉強しているのが簡易魔法。

自分の魔力を指先に集中して空中や地面に魔法陣を描き、簡単な自然現象を発動させるとの事。

その為に魔力の集中の仕方、魔法陣を覚える、素早く正確に魔法陣を書く技術を身につけなければいけないらしい。

俺が最初に覚えさせられた魔法は、アイスキューブ。

読んで字の如く、空気中の水分を冷却させて1?角の氷を生み出す魔法。

師匠のお言葉。

「冒険中、生水を飲んでお腹を壊したらシャレになりませんからね。凍らせた後に煮沸消毒して下さーね」

レベルが上がれば1ダースの氷を1回に作れるらしい。
レベルが上がつて製氷機レベル、それが俺。

そして特別魔法。

触媒を使い、多人数の魔法使いが何日もかけて発動させる簡単魔法のパワーアップバージョン。

お金も時間も、とんでもなく掛かるらしい。

国外の外交の上で、どれだけ強力な魔法陣を所有しているか、強力な触媒を保有しているのかも重要視されるとの事。

これも俺には関係ないとthoughtていたら

「可愛い弟子の為に、特別です。私が知っている特別魔法の一つを

授けましょ。絶対結界です

絶対結界。

魔物や山賊から、身を隠せる魔法。

「絶対結界は便利ですよ。野営でぐっすり眠れますし、お便所も安心してできます」

確かに無謀な体勢で、臭いを放つあれの時は狙われやすいだろうし。

そんな地味な修行が、1ヶ月近く続けれた。

ザノンの修行（後書き）

功才が使える魔法は、アイスキュー・ブレベルしかないです。
それを使って戦っていく予定です。
作者に書けたらですけど。

感想、指摘お待ちしております。

ザーバコン（前書き）

残酷な表現があるので、「注意下せ」&ザーバの初実戦です。

ガーディアン

「オーディヌスには魔物と呼ばれる生き物がいるらしい。」

ロツキ師匠曰わく

「魔物は普通の動物が、マナの影響で進化した種族なんですよ。だから動物とちがって属性の影響が濃いですよ。火を吐く魔物も珍しくありませんから」

ちなみに、今日のロツキ師匠のジャッケットは星柄。

「まあ、功才君が火を吐ける魔物に会つたら逃げられるだけで奇跡と思つて下さい。今の貴男はゴブリンに勝てるか、どうかですから」

あれだけ修行をして、ゴブリンつて。

「功才君、君はゴブリンを馬鹿にしたでしょ？確かに力も知能もゴブリンに比べたら君の方が数倍上ですよ。でもねゴブリンは基本集団で戦いますし、獲物に対しても躊躇なく襲います。君は生き物に対してためらいなく剣を振るえますか？」

「ゴブリンから逃げるのは無理つすか？」

できたら殺しは、避けたいんだよな。

「無理ですね。ゴブリンは自分より弱いと思つたら容赦なく襲いますし、ゴブリンを倒せない冒険者に依頼は来ませんよ」

「冒険者が、ゴブリンと戦う頻度は多いんすか？」

「初心者からベテランまで幅広く戦う機会が多いですよ。何しろ数が多い分、被害も多いですからね」

「被害って、やつぱり女をやつたりするんすか？」

もしかして、ヒーローになれるチャンスも？。

「それは誤解ですよ。ゴブリンは女性が身につけている貴金属が欲しいだけですから。まあ金持ちと農婦の区別もつきませんし、裸にして貴金属を探すから誤解が生まれたんでしょうね。ちなみにゴブリンの美人度はゴブの多さで決まるそうですよ」

「ゴブリンらしきゴブリンが人気な訳ね。

「それなら、何でゴブリンの被害があるんすか？」

「簡単ですよ。彼らの知能じゃ畑を耕すとか家畜を育てるのを理解できませんからね。村があれば美味しい食べ物があるだから襲うんですよ」

「バイトしないでカツアゲしてるヤンキーみてえ

「座学ばかりじゃ、飽きますね。修行もある程度したから、戦つてみましょ。ゴブリンと」

「確認しますけど俺に拒否権は？」

「ある訳ないじゃないですか」

「ですよねー」

塔にはロツキ師匠の楽しそうな笑い声と、俺の渴いた笑い声が響いた。

- - - - -

「このちの世界に来て、初めて外に出た。
そして改めて日本じゃない事を実感する。
俺が連れて来られたのは、だだつ広い湿原。

「ソニーに出てる魔物はゴブリンくらいですからね。さあ功才君、実戦デビューですよ。ワクワクしませんか？」

「ワクワクじゃなく、デキルキセキするのですよ。嫌なデキルキですけどね」

ちなみ俺の装備は皮の鎧に、
皮の兜、鉄の槍。

「本当に君はシャイですね。そして運も良い。あそこにはゴブリンが一匹でいますよ。さあレッツ！バトル」

師匠が指差す先は、緑色のボコボコした生き物がいる。
あれがゴブリンか。

ゴブリンはボロボロの服に、鎧びた剣を持っていた。ゴブリン見学をしている俺の背中を口ッキ師匠が思いつ切り押してくれた。

「は、はうー」

俺と田をあわせたゴブリンが

「グギヨー」

と、絶叫して襲い掛かってくる。
ファーストコンタクト大失敗。

「功才君ー、逃げてるだけじゃダメですよー」

傍観者を決めたロッキ師匠が遠くから叫んだ。
逃げてるんじやなく戦略だつての。

俺が目指しているのは湿原にある水溜まり。
ジャンプでそれを飛び越し、少し離れた場所でゴブリンを待ち構える。

ゴブリンの両足が、水溜まりに入ったのを見計らって、水溜まりにアイスキューーブの魔法を掛ける。

空気中の水分を凍らせる程に低温状態を作れるなら、水溜まりの水も凍らせる事ができる筈。

「ギュゲ? ギュゲ?」

足を凍り潰けにされた所為で、身動きがとれなくなっているゴブリン。

氷の厚さは、剣で壊せるぐらいなんだけどな。

ゴブリンは焦つていろいろしゃしく、剣を振り回している。

そんな奴に、正面から挑む程俺は自信過剰じゃない。

大回りして、ゴブリンの背後へ。

決して槍で突く事はない、槍が刺さつたら抜くのは結構難しいんだよ。

先ずは槍の石突きで、ゴブリンの頭をぶん殴り動きを止めて、フランクした所で、首を斬りつける。

「ふえー、よつやく動かなくなつた。師匠、これでいいんすか？」

俺は、できるだけ平然な振りをして師匠に話しかけた。
本当は涙やら酸っぱい物が溢れだそんなんだけも。

「ゴブリン一匹に随分と手間暇をかけたみたいですねけども。まあ良いでしょ？」

「ちえつ、少しは警めてくれてもいいのによ」

side ロツキ

うん、やはり彼は面白い。

私が彼に田を付けたのは必要なら利用できる物をなんでも利用しうする所。

そしてそれは自分の欲には決して使おとせずに、自分や誰かが危険に晒された時にのみに、形振り構わずに見える所。

有名な冒険者は、無謀な勇気より臆病さを持つていますからね。

臆病で卑怯でせこい戦い方をする彼の活躍を見てなさい。

勇気や戦いの美しさを、第一としている元我が一族達。

ガーナ・アーヴィング（後書き）

功才君の戦いかは、卑怯でせこい戦い方、ザコらじい戦い方にした
いです。

当然チートな大技は、使えません。
感想指摘お待ちしております。

ザ「」と家族（前書き）

頑張つて2話の投稿。
見てくれてる人いるのかな？

ザコと家族

ゴブリン退治の後も、俺の修行は続いた。

結果、体力はついた。

そして覚えた魔法。

スマートファイヤー

指先に小さな火を灯す。

早い話が、人間ライター。

師匠曰わく、焚き火をおこすのに便利。

アーススタン

地面に小さな出っ張りを作る。

気づかなきゃ敵が転けるかもしねない。

当然オークーぐらいに大きいと踏み潰される。

ウイングアーマー

体に風をまとわせて、敵の攻撃を逸らす事ができる。

対象は小鳥ぐらいの質量まで。

グラビティソード

自分の武器に重量をまとわせて重くできる。

だから制御できないと腕を痛める。

スマールシャープ

対象物を気持ち鋭利にできる。

つーか鋭くなりすぎて、人形を斬りつけたら先が欠けた。

師匠曰わく包丁を研ぐのに便利。

ストーンレイン

足元の小石を上空に巻き上げて対象に降らす事ができる。
地味に痛いだけ。

ちなみに小石がない場合は、砂でも可能。
でも拳大の石で重くて無理だった。

マジックキャンセル

自分が放った魔法の効果を消せる、それだけ。

プチパラライズ

対象者に正座した後の足の痺れを止める事ができる。

フラッシュ

眩しい光をだして目くらましをする。

当然、自分も眩しい。

光を調節すれば明かり代わりにできる。

夜中トイレに行く時には重宝した。

他にも幾つか覚えたが、みんな生活を便利にできるレベルでしかない。

一度、師匠に強力な魔法を教えて欲しいとお願いしたら

「良いんですけど、制御できない魔法を使うと、下手すりや精霊から総スカンをくらいますよ。強力な魔法は自然破壊ですからね」

精霊魔法が使えないでも、精霊に嫌われると簡易魔法も使えないらしい。

強力な魔法を使える様になるには、対象者のみに影響を与えるぐらいに制御ができないやいけないとの事。

「こんなので、俺は生き残れるのか？」

いや、まだ修行すれば強くなれる筈だ。
できるだけ強くなつて、結果を出して地球に帰るんだ。
きっと、家族やダチが心配しているに違いない。

彼奴らはどうだろう。唯は、俺が居なくなつた原因なんだから気に病んでなきやいいが。

でも全く気にしていてもらえなかつたら、それはそれでへこむ。

「師匠、俺の親が心配していないか、わかりませんか？」

「わかりますよ。……あー、やめときましょ」

「その間は何なんすか。いや、わかつてましたけどね」

親父達は、俺に興味ないし。

「良かつたら、聞かせてくれませんか？君は私の大事な弟子なんですから」

「うちの両親は芸能人なんすよ。結構有名な俳優と女優でね。忙しくて殆ど家にいないんすよ。それに…」

「まだあるんですか？」

「姉と妹がいるんですけど2人共お袋似で顔が良くて小さい頃から

芸能人になつてゐるんですよ。まあ当たり前ぢや当たり前なんですよ
ども親父達は自分のプライドを満たしてくれる姉貴達の方が可愛い
らしくてね。1回雑誌のイタンビュ－で仲の良い4人家族なんて紹
介されてましたし

「それじゃ功才君の小さい頃は誰が面倒を見ててくれたんですよ?」

「爺ちゃんと婆ちゃんですよ。親父の親のね、家族で俺を褒めてく
れたのは爺ちゃん達だけでしたし。そつか、やっぱり俺が居なくて
もうちの家族は変わらないか」

運動会や授業参観に来てくれたのも、爺ちゃん婆ちゃんだけだし。
その爺ちゃん達も、親父達とケンカして田舎に戻ったし。

「でも、でも君を心配している人がいましたよ。5、6人ぐらい」

「少なつ、学校は親父が手を回したんでしょう。俺は病欠か下手すり
や転校扱いになつてますね」

「そうですか。それならこの世界で新しい絆を結びなさい。誰でも
ない、君だけの絆をね」

「俺にできますかね」

「当たり前ぢやないです。君は私の大事な弟子なんですよ」

side ロツキ

功才君が、妙に物分かりが良いのには納得しました。

彼は色々な事を、諦めてきたんでしょうね。

そして多才な友達に追いつく為に、努力をしたんですね。
能力が足りないから、小技や工夫で補う様にしたんでしょうね。
家族に恵まれないか、師匠が師匠なら弟子も弟子ですね。

ザ「」と家族（後書き）

ちなみに功才の見た目は中の下くらいです。

美男 + 美女の子供が、格好いいとは限りません。

感想指摘お待ちしております。

見てくれている人がいたらですけどねー

「」と卒業試験（前書き）

この作品に感想がきて、嬉しくて又書いたりやいました。

ザ・ヒト卒業試験

「ぐああー、ねみ。スマールファイヤーっと」

外はまだ薄暗いが、修行の時間を考えると朝飯の支度は早めにしておきたかった。

この塔に住んでいるのは、俺と師匠だけ。
だから必然と家事は弟子である俺の仕事になる。

来た当初は勝手がわからないので、師匠任せで、だつたんだけでも出てきた料理は三食とも薬草のスープのみ。

つうか、薬草をすり潰して水で煮ただけ。
味付けは塩のみ。

師匠曰わく特別な薬草で栄養も補えるし、魔力も強くできるらしいけど。

料理は、婆ちゃんに教わってるし家の生活も殆ど一人暮らしに近かつたから料理はお手の物。

師匠が、低温の魔法を付与した箱から野菜と卵を取り出す。パンは何日か置きに来てくれる行商人のおっちゃんから買っている。
鍋に水を張り火にかけ、干し肉を入れて出汁をとる、後は師匠ブレンドの薬草と溶き卵、トマトを入れると俺流薬草スープの出来上がり。

何とか慣れた何時も通りの異世界での日常が始まる筈だった。

「おはようございます。今日も良い匂いですね。あつそりだ功才君、
今日卒業試験をしますから頑張って下さいよ」

「はいっ？もう卒業試験ですか？てか試験なんて今までしてないっ

すよ

「言つてないだけですよ。今の功才君なら初級冒険者として立派に通用しますよ。… 多分」

師匠、多分は止めて欲しいんですけども。

「マジックですか？それで卒業試験は、何をすれば良いんですか？」

「簡単ですよ。墓場にでるオーガを倒すだけですから」

「師匠、オーガつて人を食べる団人のオーガつすか？無理つすよ、餌になつて終わりです」

「大丈夫、大丈夫。そのオーガは、オーガの中では弱くて死肉しか食べませんし、巨人って言つても功才君の倍くらいの大きさですしいですか」

第一、足にしか槍が届かない。

「オーガは夜にしか出ませんから、昼のうちに墓場を良く見て下さいねつ。」
「飯を食べたら墓場に行きますよ」

- - - - -

師匠に連れられて来た墓場に人気はまるでなかつた。

ただでさえ人気の少ない墓場にオーガ騒動なんてあれば人が来ない

のも、頷ける。

行列のできる墓場なんてやだけど。

墓場は木が鬱蒼と茂つていた。

「オーガはあそこから来るみたいですね。ほら」

師匠が指差した森の一部が薙ぎ倒されていた。

オーガの大きさからして、通れる道は限れてくる。

「師匠、オーガを倒せたら他の魔法も教えて下せよ」

「流石は功才君、せこい手を思いつきましたか。いいですよ、卒業記念に他の魔法も教えてあげます」

「わかりました。まずロープと木の杭が欲しいんですけども」

夜の墓場が楽しいのは、髪がピンと立つ 太郎ぐらいな訳で。

「ちきしょー、師匠の奴。墓場に置いてけぼりって酷くね？」

いくら魔物が来ない絶対結界の中にいるとはいえ、怖いんだって。その恐怖もあれを見た時よりはましだった。

何あれ？

俺が見つけたのは目的のオーガさん。

簡単に言うと3m近いプロレスラーって感じ。

それが、よだれを垂らしながら歩いてくる。

あんなの見た後なら、唯に絡んで来たスキンヘッドボーイにハグする事もできそうだ。

(確かに恐くなつて言ひと意識しうきて、余計に恐くなるんだよな。
……無理だ、あれはどうやっても怖いし)

でもオーガは段々近づいてくる。

俺がオーガの通り道にいるから当たり前なんだけども。

仕方ない、ザロの悪あがきをみせてやる。

「フラッシュ」

先ずはオーガの目の高さにフラッシュを発動する。
当然怒つて追いかけてくるオーガさん。

予め木に張つておいたロープを超えて、お次は

「チパラライズ」

オーガの足を痺れさせる。

埋めて置いた木の杭の間をすり抜けて、さらに逃げる。

よつしゃ、オーガがロープにけつました。

そもそもつて

「グラビティソード」

対象は俺の武器でも、木の杭でもなくオーガ。

痺れた足で、モロにこけた上に体重を増加させられたオーガが木の杭に倒れていく。

静かな墓場に地響きと一緒にオーガの絶叫が響き渡る。

「し、師匠。倒したから出て来て下さいよ。腰が抜けました」

side ロツキ

グラビティソードを、オーガにかけましたか。
いやはや窮鼠猫を噛むとは、まさにこの事ですね。
オーガは私が倒す予定だったんですけどね。
あくまで功才君には、適わない敵と相対した時の冷静さを、教えようとしただけですし。

「功才君、オーガキラーの名前をあげましょつか？ オーガを倒せる冒険者なんて中々いませんよ」

「こらないつすよ。あんなギリギリなヤバさは、もう勘弁っすからね」

あの限れた魔法で、オーガを倒しましたか。
卒業記念に小技な魔法をもう幾つか、私の背中で喚いてる弟子に授けましょつ。

ザコと卒業試験（後書き）

使い古された倒し方になっちゃいました。

でもこれがザコの戦い方です。

あまり戦闘描写を多くするとネタ切れになりそうだから重しなき
や。

ちなみに普通に功才君がオーガと戦つたら瞬殺されます

ザーハの旅立ち（前書き）

異世界物なのに、美少女どころか女性すら出てこません。
今回も欠陥魔法が目白押しです。

ザコの旅立ち

「功才君、卒業おめでとうございます。先ずは新しい魔法です」

プチサンダー

ちょっとビリっとする。
慣れると癖になるかも?'

ライトソード

対象物を軽くする。
引っ越しに最適。

ヒートハンド

触れた物を温かくする。

お年寄りや冷え性の人の人気者になれるかも?

シールドボール

敵の大抵の魔法・攻撃を防げる。

アイスハンド

触れた物を冷やす。

風邪の看病をする時には喜ばれる。

プチヒーリング

スリキズぐらいは治せる

プチテス

殺菌作用満点

相変わらず、使えない魔法ばかり、選んでくれて…

「まともなシールドボールぐらいじゃないですか」

「あつ、シールドボールを使う時は気をつけ下さい。毒霧を防ぐ為に気密性を高めたんで、酸欠になりやすいです。後頑丈にしきて中からも壊しにくいですし」

死の棺桶ならぬ、死の球と。

「それならせめて装備は強力なのをお願いしますよ」

「いやだーな。功才君が強力な装備を身に着けていたら賊や貴族に直ぐに目をつけられますよ」

「賊はともかく、貴族はなんですか?」

「簡単ですよ。の人達が大事なのは名誉。ポツとでの一般市民冒険者が強力な装備を身に着けていたら妬みますよー。難癖つけて奪い取るか、配下に命じて強奪するでしょうね」

「マジっすか?」

この様に素晴らしい物は、高貴な人にこそ相応しいですから。多分そんなやり取りをするんだろう。どここの世界でも点数稼ぎは重要と。

「マジですよ。大概の貴族はそんな者だと、思つていた方が安全ですよ」

「皮の鎧と鉄の槍をお願いします……」

「流石は功才君、物分かりがいい。特別に砥石もつけて上げます。それと餞別にお金と『データボール、パーソナルカードをあげますから』

「データボールとパーソナルカードってなんすか?」

「データボールには、オーディニスの魔物や植物のデータが入ります。功才君の戦い方には情報が重要ですし、折角の弟子が毒キノコを食べて死んだじやつまりませんしね」

「持ち歩きに便利な図鑑つて感じですか」

「そんな所です。パーソナルカードは重要ですよ。平たく言えば身分証明書ですけど、なくしたら市民から奴隸にされかねません」

再び…

「マジっすか?」

「マジですよ。まあそれは犯罪者とか妬まれてる人限定ですけどね

「でも盗まれたりしたら、ヤバいつすよね」

「それは大丈夫ですよ。体に埋め込みますから」

「へっ？ 埋め込むってなんすか？」

「そのまんまでですよ。手とかに埋め込んだら斬られちゃいますからね。頭に埋め込みます」

「ヤバいですって。頭はヤバいですよ」

「頭にその人のデータが一番集まっているんですよ。動いてくれたらりしたら、それこそヤバいですよ。データボールも一緒に埋め込んであけますね」

ちなみに俺のデータは

名前

コウサ・ザイツ

種族

人間・猿人族

年齢

16

身分

一般市民

職種

無職

やばい、なんか泣けてきた。

「次にお金ですよ。愛弟子への餞別ですからね。奮発して十万デュクセンあげちゃいます」

データボール参照

デュクセン

デュクセンは皇国で使われているお金の単位なんですよ。

1デュクセンは1円と書いて下さい、功才君。

データボール、なんかむかつく。

しかし十万円とは、リアルな金額。

「安心して下さい。サバイバルキットもあげますから。ござとなつたらリアルサバイバル生活です」

「師匠、前から思っていたんすけど、人の気持ちが読めるんすか?」

「それは私が凄い魔導士ですし。あつ私は研究に邁進しているから無名ですんで、弟子と名乗つてもネームバリューは期待できませんよ」

怪しい。

この人が本当に魔導士かどうかも怪しい。

「とりあえず、近くの町に着いたらギルドに登録して下さい」

「はい。それで？」

「後は仕事をこなしながら、野となれ山となれです」

「魔王を倒せとか、姫を救えみたいな具体的な目標はないんですか？」

「そんな都合いい目標なんてないですよ。依頼をこなして自分で目標を作つて下さい」行こう。

師匠の事は忘れて、とりあえず前に進もう。
でなきや、何にも変わらない。

「分かりました。それでは行ってきます。それとお世話をになります」

た

side ロツキ

ロツキは功才が、いなくなつたのを確認すると手早く魔法陣を構築する。

それは、どれだけ高名な魔導士でも構築するのが不可能に近い高度な魔法陣。

その魔法陣から呼び出された者も、力や誇りの高さから決して人間に従う事はない種族。

「お呼びでしょうか？」

「貴男、功才君の動きを逐一私に教えて下さい。貴族みたいな馬鹿

共に殺されそうなら助けてあげて下さいね。でも普段は決して手を貸さないで下さい、彼は追い詰めた時な方が、面白い事をしてくれますから」「はっ、わかりました。しかし何故そこまで気にかかるのですか？たかが人間の猿人族一人を」

「見たいんですよ。最弱が階段を駆け上がり、最強と渡り合う瞬間を。そしてそれが私の目的にも繋がります」

#「」の旅立ち（後書き）

次から師匠は、傍観者になつていきます。
またキャラの名前を考えなきや。
感想指摘お待ちしております。

ザ・ノ・旅（前書き）

今回は、殆ど功才君しか登場しません。

ザコの旅

師匠の住んでいた塔を後にした俺は街道を歩いている。

魔物はマナの濃い地域に多く出没するらしい。

マナの濃い地域＝自然が豊かな地域って事。

当然、人の手が入っている街道には、魔物は出没しにくいらしい。

あくまで、らしいだから今の俺はフル装備。

皮の鎧を身につけて、手には、鉄の槍を装備。

背中には、荷物一式を詰めたりュックサック。

行き交う人々は、普通の格好をしている人が多いから目立ちまくっている。

だつて獅子は兔を襲うのにも全力をだすんだぜ？

だつたらザコが、身を守る為には世間体なんて気にしてられない。それもこの街道を進んだ先にある街、ブラングルまでの辛抱。そしてそこで冒険者、ギルドに、登録をすればフル装備でも、ただ今冒険中の言い訳ができる。

ギルドに登録をして依頼をある程度こなしたら、どこかのパーティーに加入をする予定。

俺としては、直ぐにでも、パーティに入りたいんだけども、実績のない冒険者をいきなり加入させてくれるパーティーはないらしい。

あるとしても下心を疑つた方が安全との事。

それは装備品の強奪、下心による暴行、身代わり等々。

逆にある程度の実績があれば、周囲の目があるから大丈夫らしい。

まあ、俺としては簡単な採集や、ゴブリン退治で生活を維持できるなら、それが一番だ。

それが無理ならバイトをする予定。

俺の冒険方針は、身の丈にあつた冒険なんだし。

夕方前にはブラングルの街に到着する事ができた。

ブラングルの街は、周囲をグルリと堀に囲まれていた。

街に入る人を観察していると門をくぐった時にパーソナルカードをスキヤンする仕組みらしい。

そりや畠帰りの農家の人が達や観光客を一々チェックしていたらキリがないだろうし。

門を通る前に、鉄の槍に布を被せて、皮の鎧から布の服に装備を変更する。

だつて、俺のデータは無職の一般市民なんだから。

今は夕方、冒険者ギルドは明日にする。

だつてら、今から新規登録なんて行つたらヒンシュク者確定だし。

俺が今しなきゃいけないのは宿屋探し。

その為に俺が目をつけたのが、普通のパン屋さん。

高級な宿屋なら、自分の所でパンを焼くだろうけども、普通の宿屋なら客に提供するパンは、地元のパン屋から買つている可能性が高い。

夕食を兼ねたパンを買ってパン屋の親父に尋ねる。

「ここのパン美味しそうですね。明日の朝も食べたいから、このパンが食べれる宿屋は、ありますか？」

パンを誉められたら上に、宿屋に客を紹介できるとあつて親父は大張り切りで教えてくれた。

紹介された宿屋は、夕飯抜きだから、一泊3千デュクセン。

ちなみに宿屋の受付も親父だった。

異世界のパン屋や宿屋に可愛い看板娘がいるつていうお約束は俺ではないらしい。

朝飯を誉めて、宿屋の親父から冒険者ギルドの場所を教えてもらひ。

うん……、猫耳やエルフの猫耳の冒険者がいるなんてお約束も消された。

ギルドの中は、男子校並みの汗臭む。

受付にいるのも、確実に元冒険者なオッサンだし。

パーソナルカードの確認で登録を完了。

初心者用の掲示板には、あつたのは

ゴブリン退治1匹3千デュクセン。

薬草採集

100ガン3千デュクセン

ちなみに1ガンは1グラムに相当するらしい。

でも薬草100グラムって、結構な量なんじゃね？

ちなみにオーク退治は、1匹3万デュクセンらしい。

ゴブリンは集団行動を常としているけど、オークは単独行動が多いらしい。

そして俺も1人。

ゴブリンの集団に、囮まれてぼこられるよりもオークに狙いを定めた方が安全に違ひない。

オークのデータは

功才君、オークは2本足で歩く猪だと思って下さい。

知能はゴブリンより、少し高めですけども決して高くはありません。

「ブリオンとの一番の違いは、自分の力を誇る為に単独行動を好んでいます。

データボールは、便利なんだけど師匠の声が頭に響いてくるのが辛いんだよな。

ザ・ノートの旅（後書き）

感想、指摘お待ちしております。

チャーチマーク（前書き）

オーク退治に一話必要なのが、この小説です。

10月4日一部内容変更しました

前からご指摘があつた電気抵抗のくだりです

ザコとオーケ

オーケは、猪に近い性質をもつているらしい。

んでもつて、夜中に烟を荒らしに来るから、農家から退治依頼が多い。

オーケは、体がでかい分1回の被害も半端じゃないらしい。

夜中に烟を荒らしに来るのは流石は、猪から進化した魔物だよな。

とりあえず猪を基本にオーケへの対策を考えてみた。

オーケ対策 1

猪は犬並みに鼻がきく

つまり背後からの攻撃は無理、つーか先に気付かれる可能性大

対策 2

猪突猛進は嘘。

まあ、一本足な時点で、その可能性はないし

つまり俺が奇襲に成功する可能性は、限りなく低いと…。

それなら逆に向こうに気づかせてからの作戦をたてた方が現実的だよな。

……

よつし！

これなら、他の魔物にも使えるかもしない。
武器屋で、中古の銅の槍を2万デュクセンで購入。
中古だけに、槍の頭はあまり尖ってないけど。

準備よし、後は結界をはつて畠で、夜とオークを待つだけだ。

暇だ

夜の畠に一人ぼっち、当然話し相手なんかいる訳がない。
まあ、話し声がしていたら、オークが警戒して来ないかもしない
けどね。

（久しぶりに携帯でもチェックするか。オーディヌスには電波何て
ないだろ？けど、ここに来る前にきたメールがあるかもしない）

塔にいた頃は、修行が終わると疲れて速攻爆睡していたから、携帯
を見るのはオーディヌスにきて始めたたりする。あつ、唯からメ
ールが来てた。

「功才、怪我は大丈夫？あんなの相手に功才が勝てる訳ないから怪
我だけが、心配だよ」

怪我が確定なのね。
絵文字もついてないし。

でも、これから俺は命がけの戦いが待っているから、怪我じや済ま
ないかもしない。

闇夜に光る紅い目、荒い息づかい。

オークさんのご登場です。

いや想像はしてたけど、2m超えの直立で立つ猪は、かなりきつい。
フゴーアゴーって鼻音が聞こえてるし。
結界を解除した途端に、紅い目が俺を見つけた様で、オークさんが振り向いてくれた。

オークさんは、人間＝敵とばかり、殺氣満点。

そんなオークさんは、棍棒と言つ名の丸太で殴りつけてきた。

「し、シールドボール」

お、遅せー。

シールドボールは開閉式ドーム並みのスピードで俺を包んでくる。
そしてガンッ！と、鈍い音が周囲に響く。

ギリギリッ、本当にギリギリのところで間にあつてくれた。
棍棒は、俺の頭数十？の所で止まっている。

（今度からシールドボールを使う時は、早め早めにしないとヤベえよな）

オークさんは、俺に棍棒が当たらなかつたのが不思議な様で狂つた様に棍棒で殴りつけてきた。

ここからはオークの体力が限かるか、俺が酸欠になるかの我慢比べ。
意識がもうひびいて、お花畠が見えかけた頃よしやくオークも疲れた様で殴るのを止めた。

深呼吸をして、先ずは

「マジックキャンセル」

シールドボールが壊さないなら、消去をする。

そして

「シャープネス」

銳さを増した銅の槍で、オークの胸を突く。
予想通り銅の槍は、オークの分厚い胸筋に阻まれる。

「アイスハンド」

槍が十分に冷えるまで槍を押し続ける。

「プチサンダー」

プチサンダーで俺が狙つのは、銅の槍。

銅は、他の金属に比べて電気抵抗が少ない。

そして冷やされた銅の電気抵抗はさらに少なくなる。

いくら軽く痺れる程度の電撃でも、心臓間近でくじつダメージは計り知れない。

オークは、胸を掻きむしりながら畠に倒れ込む。

ついでに、俺も安堵から畠に倒れ込んだ。

翌朝、依頼主の農家にオークの死体を確認してもうつ。

銅の槍の値段を差し引くと、一晩かけて7千デュクセンの稼ぎ。
宿屋に泊まるつて飯を食べたら、殆どに無くなつてしまつ金額だけ
ど。

「やつた、やつたー。誰の力でもねえ。俺がオークを倒して依頼を
こなしたんだ」

朝日が溢れる畠の中で、向こうにいた時には、味わう事ができなか
つた充実感を感じていた。

ザ・ヒーロー（後書き）

パーティー加入を先にするべきか、メインヒロインを先にだすべきか。

感想指摘お待ちしております。

ガーネットヘルマーマ騎士（魔晄砲）

新キャラ登場です

ザーバとフルアーマ騎士

初依頼とこ「う事もあり、ギルドのおっちゃんが、オークの死体を確認にきた。

「きちんと倒したみたいだな。ふむ、このオークを3万デュクセンで買い取らせてもらおう」

「マジ。マジでそんなに高く買ってくれるんすか？」

「ああ、このオークには、大きな傷が殆どねえ。オークの毛皮は、防寒具から防具まで色々と用途が広いからな。むしろギルドとしては大歓迎さ」

（依頼料と合わせると、6万デュクセン？！「ゴブリン30匹分だぜ。これからはオーク退治を中心には依頼を受けていこ）

そして

「おっちゃん、オーク退治の依頼は、きてないっすか？」
俺にオーク退治の依頼がくるまでになつた。

「お前宛ての依頼はきてねえよ。たまにはゴブリンでも倒してみねえか？」

「パス。俺はパーティーを組んでないから、ゴブリンに囲まれた終わりつすよ」

とつあえず、他にどんな依頼があるか見て回つていると田を合わせ

たらいけない方がいた。

身長は150cmくらいで、体格は細身だと想つ。

性別は… わからない。

なんせピカピカに磨かれたフルアーマーを身につけているんだから。いや、ビビリの俺でも街中でフルアーマーは着ないぞ。フルアーマーは、自分に酔っているのか依頼を見ては歌劇団の様な、オーバーアクションを披露している。

「薬草採集？ 傷ついた民の為に薬草を集めのも素敵なお仕事じゃないかー」

「ゴブリン退治？ 醜いゴブリンは、僕が華麗に退治をしてみせるわ

フルアーマーの声の高さと、背の高さからすると少女か、声変わりする前の少年かもしない。

でも関わっちゃいけない。

あれは関わっちゃいけない者だ。

フルアーマーは、小さいな依頼書の前で立ち止まる。

それは朝から誰も受けていない依頼。

子供の字で、うちのはたけにでもおーくをたおしてください、とだけ書かれていた。

ギルドの職員も、子供から料金は取らなかつたんだろう。

それに依頼料金も書かれていない依頼を受ける冒険者がいる筈ないし。

「諸君見たまえ、この依頼書を。幼子の必死の願いを叶えてあげようといつ正義の心を持つた冒険者はいないのかい？ 悲しい事だね」

(それならお前が受けろよ。ボランティアじゃないんだから、無料の依頼なんて受けたら、次の依頼の時に値切られるだろうが)

そんな感想を持ちながら、違う依頼書を見て、気配を消している俺の肩を掴んだ奴がいた。

「君は最近有名なオーク退治のザイツ君だろ？どうだい、僕と一緒にオークを退治してくれないかい？」

「断るつすよ。俺は、そんな立派な鎧を身に着けた騎士様の足を引つ張るだけっすから」

「悲しい事を言わないでくれよザイツ君。君の力なら簡単にオークは倒せるんだろ？」

「断るつす。理由その1・オーク退治は毎回命がけなんすよ。その2・依頼料金のない依頼なんて受けたら、必死に貯めたお金で払ってくれた他の依頼者に申し訳がたたないつす。理由その3・本来は畠を荒らすオークの退治は、国や街を治めてる騎士様のお仕事じゃないつすか」

「有名なザイツ君もお金で依頼を判断するんだね。嘆かわしい。なら僕が3万デュクセン払つから、この依頼を受けてくれないか？」

フルアーマーは俺に依頼を受けさせようと必死だ。

そういうや、俺がオーク退治をする前は貴族の次男坊が、自己満足の為にオークを倒していたらしい。

フルアーマーは、その貴族の関係者の可能性が高いな。

断つたら、俺の不評を流すつもりなんださ。

「4万デュクセンとオークの毛皮の権利を俺にくれるんなら、受け
てもいいですよ」

「なぜ、1万デュクセン高いんだい？ 君はそんなにお金が欲しいの
か？」

「1万デュクセンは、あなたのガード料金つすよ。傷が一つも着い
てない鎧は、実戦経験がない証拠つすからね」

フルアーマと一緒に、依頼された畠に着いた。

「ザイツ君、なんで僕を藁の中に押し込めるんだい？」

「オークは、鼻がいいんすよ。鎧の金属臭なんて直ぐ気付いて姿を
現さないつすよ」

「わかったよ。仕方ない君に従つよ」「みつぽど、俺の事を調べたい
らしく、フルアーマは、素直に藁に潜り込んだ。

でも

「ザイツ君、ザイツ君。君は闇は恐くないのかい？」

「怖かつたら、オーク退治してないつすよ」

「ザイツ君ザイツ君、何か話でもしないかい？気が紛れると思つんだけども」

「オークは耳もいいんすよ。静かにするつす」

ようやく大人しくなったフルアーマを確認して、結界をはる。

紅い目が闇夜に浮かぶ。

オークが来た。

「出たな。オーク、僕がお前を退治してやる。白雷の精靈よ、我に力を貸したまえ。サンダーブレー、痛いっ。何をするんだいザイツ君」

「お前は馬鹿か？そんな魔法をぶつ放したらオーク以上に烟を荒らしちまうんだよ、引っ込んでろ。シールドボール」

俺は銅の槍の石突きで、フルアーマを叩いて、藁に押し戻す。

俺に依頼が増えた一番の理由は、烟を殆ど荒らさないでオークを退治してるからだ。

例の貴族様は、金に飽かせて手に入れた精靈魔法を使いまくつて烟を滅茶苦茶にしたらしい。

でも相手は貴族様、依頼主は文句が言えなかつたらしい。

.....

「出で来いよ。オークは退治した。お坊ちやまは、とつと金を置いてお家に帰りな」

「ひどいよザイツ君。僕は女の子なんだよ、女の子に優しくしなきゃいけないんだよ」

藁の中から出てきたのは、兜を脱いだフルアーマ。

兜の中は、茶色いショートカットの美少女だった。

ガーネットフルアーマ騎士（後書き）

ややく女性キャラ登場です
感想指摘お待ちしております

★パリマニアの田舎こ（繪書）

フルアーマ少女の名前がでます。
フルアーマ少女今回も残念に

ガーリッシュの由来

s i d e ロツキ

「それで功才君は、その少女に興味を示しましたか？」

「いえ、全く。何か焦っている感じでした」

美少女に興味がない理由はなんとなくわかります。
幼なじみに2人の美少女があり、家族に芸能人がいる功才君にとって美少女の存在は対して珍しくないでしょう。

「ふむ、その少女は何か言いましたか？」

「少女がマクスウェル様わかりましたと、咳いた後から功才殿が焦り始めた感じがしましたが」

それだけで、焦るなんて功才君は相変わらず臆病ですね。
うん、安心しました。

s i d e 功才

マクスウェル家

ブランドンを領地にもつデュクセン皇国の伯爵家。そして俺は最近マクスウェル家のある男の名前をよく聞いていた。

デュラン・マクスウェル

マクスウェル家の次男にして精靈魔法の使い手。

デュランは俺がオーク退治をする前に、精靈魔法を派手に使いまくつてオークを退治していたらしく。

煙で派手に精靈魔法なんて使うと、結果は簡単。

煙にはオーク以上の被害がでる。

でも相手は貴族様、農家は泣き寝入りするしかない。

当然、煙に被害をださない俺の退治方法に入気が集まる。

つまり、デュランの出番は激減。

デュランは、自分の活躍の場を奪われたと憤慨したに違いない。

そしてあの、フルアーマ少女。

フルアーマは騎士の証。

フルアーマ少女は、マクスウェル家に仕える騎士か、その家族と考えるのが自然。

つまり、デュランに俺の正体がばれたんだよな。

それなら俺がとる行動はただ一つ。

ブラングルから、いやマクスウェル家の領内から逃げてやる。

宿を引き払い、ギルドのおっちゃんに紹介状を書いてもらつたら直ぐ逃げるんだ。

ブラングル冒険者ギルド

「おっちゃん、おっちゃん。マクスウェル領外の冒険者ギルドへの紹介状を書いて欲しいんですよ。できたら今すぐにお願いするつす

「ザコ」、旅支度で紹介状つてブラングルから出るのか？」

「詳しい話は勘弁して欲しいんですよ。お願いするつす

お願ひをするんだから、俺はきちんとギルドカウンターに頭をつけ
てお願ひをしている。

「いいけど、お前に客が来たみたいだぜ？」

ギルドのおっちゃんが、指差す先にはフルアーマ少女と銀色の髪の
美男子。

フルアーマは、俺を見つけるとニヤリと笑った。

「ザイツ君みーつけた。マクスウェル様、あの男がお探しのオーケ
退治のザイツです」

「ふむ、じ苦労。ザイツとやら済まぬが、話をしたい」

「いやー、俺みたいなザコと話をしたら貴族の名前が汚れちゃうつ
すよ？それに俺はマクスウェル様の領内から血口転出させてもらつ
つすから」

「我が領内から居なくなるか、それは残念だ。それなら僅かでも礼
をせねばなるまい」
お礼参り？

「いやいや、高貴なマクスウェル家のじ次男様とお話できただけで
礼は充分つすよ」

「何か勘違いをしてないか？私の名はシャイン・マクスウェル。マクスウェル家の長男だ。そしてお前に接したのが、ミント・プロッサム」

「ミントだよ。これからよろしくねザイツ君」

「『コトと笑いながら、ミントが手を出してきた。

「これから？」

「ザイツ頼みがある。君の旅にミントを同行させてくれないか？」

地獄への道案内人つて、意味じゃないよな。

「シャイン様、何故つすか？」

「プロッサム家は我が家に仕える騎士の一族でね。プロッサムの娘のミントにザイツの戦い方を学ばせたいからだよ」

「ザイツ君、僕は無視なの？腕が疲れちゃうよー」「ミントが騒いでいるが、無視をする。握手イコール契約を認めた事になるし。

「戦い方なら、同じ精霊使いのテュラン様がご適任かと思いますが

「ザイツ君、僕を無視してるのでねえザイツ君つたらー」

「ミントは、まだ無視。

「あれは駄目だ。民の事を考えれぬ馬鹿は、皇国騎士団に送り鍛えなおしている」

「条件があるつす。それを認めてくれれば、旅に同行してもいいつす」

「まつ、まさか旅の条件は可愛い僕を自由にさせろ、なんてイヤらしい事じゃないよね」

「うむ、まず聞こう」

「1人で、騒ぐミントを、シャイン様もスルーした。この人は信用できる。」

「デュラン様を始めとする貴族に手出しをさせない事、許可なく精霊魔法を使わない事、最後にあの暑苦しい鎧を着ない事。この3つです」

「シャイン様も僕を無視？それにザイツ君、その精霊魔法と鎧がない僕は無力な少女だよー。はつ無力な僕を無理やり。ザイツ君、キミって人は」

「ザイツ、その訳を聞かせてくれないか？」

「ミント様は可愛らしい容姿をしており、しかも騎士の家柄つす。2人旅なんてしたら貴族の嫉妬の対象にしかならないつすよ。精霊魔法を使えるのは、精霊魔法を買える家の娘だという事つす。」

つまり身の代金田当ての誘拐の危険性がある。鎧はあんなのをつけていたら長旅なんて無理っすからね

「ザイツさすがだな。認めよ」

「ザイツ君、だつたら僕の手を握ってくれよ。もう痺れてきたよ」

ミント、まだ手をだしてたんだ。

side シャイン

ザイツは、ミントと握手をすると、ギルドを出て行った。

思わず安堵の溜め息を漏らしてしまつ。

サイガの話は、数週間程前にデュクセン皇帝から聞かされた。

弟のデュランがザイツという冒険者に復讐を企てているから、何としても阻止をしようと。

普段は剛毅なデュクセン皇帝が青ざめて震えながら伝えてきたんだ。デュランの悪評は前から耳に余る物があつたから、皇国騎士団に入団させて鍛え直す事にした。

そして私はザイツの事を、独自に調べ始めた。

戦い方は面白いが、皇帝が怯える力では、決してない。

しかし敬愛するデュクセン皇帝には、安心してもらいたい。

それならザイツに鈴をつける必要がある。

下手に知恵が回る奴なら、ザイツは警戒するだらう、しかし不真面目でもいけない。

だからミントを選んだ。

「ミント・プロッサムがザイツ殿の旅に同行する様です。しかしあのデュクセン皇帝に何をおっしゃったんですか？」

「簡単ですよ。私の可愛い弟子を、お前の所の馬鹿貴族が傷つけなるなり、デュクセン皇國で本気で暴れますよと言つただけですよ」

#パラノイアの由来 (後書き)

ミントをヒロインとするか迷つか悩み中です。
思ったより面白いがキャラになりやつです。
感想・指摘お待ちしております

ザ・ヒーローの旅 1 旅の開始

side 功才

「プロッサムさんのパーソナルカードを見せてもらつた。

名前

ミント・プロッサム

種族
人間・猿人族

年齢
16

身分

騎士

職種

魔術騎士見習い

(契約精霊・白雷の精霊)

「魔術騎士のプロッサムさんは、どんな魔法が使えるんすか?」

「ザイツ君、やつぱり僕に興味津々なんだね?色々使えるから喜んでよ。それこれから一緒に旅をするからミントでいいよ」

「それなら俺の事も、コウサでいいですよ。ミントさん期待してる

つす

ミントの親が、精靈魔法を覚えさせた理由がわかった。

「火のマナよ、ここに集結し敵を焼き尽くせ。ファイヤーボール」
スーパー・ボール大の火の玉が飛んで来た。

ちなみに鉄の槍で叩き落とせた。

「冷氣のマナよ。その力で敵を凍りつけ。アイシクル」

震えるぐらいい寒くなつたんで、ヒートハンドで温まつた。

「雷のマナよ、その閃光で敵を焼き尽くせ。サンダー」

雷が明後田の方向に飛んでいった。

「水のマナよ。奔流をもつて敵を彼方に流せ。ウォーター」

俺がズぶ濡れになつた。

「大気と火のマナよ。力を合わせて敵を弾け飛ばせ。ボム」

爆竹みたいな爆発が起きる。

「どうだい？」「ウサ君、僕の魔法は？」

「わかつたっすよ。ミントは剣術が得意なんすよね」

ミントが使った簡易魔法は、ロツキ師匠の嫌がらせ魔法と違つて、本来どれも強力な筈。

多分、ミントは魔法陣にうまく魔力を編み込めていないんだろう。まあ、1人より2人、組み合わせれば戦略は広がる。

「コウサ君よ、良くなつてくれたね。僕は騎士だから剣術の方が得意なんだよ」

まあ、少なくとも俺よりは強いだろ？。

「それじゃ次に向かう街を決めたいんで相談に乗つて欲しいっすよ。デュクセン皇国で、ブラングルより規模が大きく周りに自然が同じぐらいの街はあるっすか？」

「コウサ君、僕は首都デュクセンに行きたいな」

「デュクセンには皇国騎士団がいるから、馴目つす。ミントさんが騎士団が手に負えない依頼とか騎士団が嫌う依頼を受けていいなら別つすけど」

本来、魔物退治とかは統治者の役割なんだし、皇国騎士団なんて関わりたくもない。

「それならブルーメンはどうかな？」

ブルーメンは「データボール」によると、芸術都市ブルーメンと呼ばれているデュクセン皇国の中核都市。

デュクセン皇国における音楽・美術・演劇の中心地。

芸術都市って事は、貴族が観光に訪れるだらつから治安は、安定していると思う。

観光都市だと宿代が高いから、冒険者の数は多くはないだろつ。俺でも依頼には、事欠かないと。

「ブルーメンか。いいんじゃないっすか」

「そうだよね。ブルーメンは良い街だよ。丁度素晴らしい劇を上演しているんだ、貴族の男性と女性騎士のラブストリーぜ。コウサ君も見たくなつたろ?」

ミントは、何かを想像し、頬を赤らめて自分の世界に入り込んだ。

(ミントの頭の中では貴族=シャイン様、女貴族=ミントの劇が頭の中で上演されてるな)

side ロツキ

「功才殿とプロッサム家の子女ミントは、ブルーメンに向かう様です。しかし功才殿は異性としてミントには関心がない様で」

「仕方ありませんよ。功才君は恋愛でも勝てる見込みのない戦いはしないでじょ。マクスウェル家の長男じや功才君に勝ち目はありませんからね」

「しかし功才殿の頃のお年なら、恋に恋してもおかしくはないので
は？」

「前にもね、功才君が言つたんですよ。確かに自分は美少女に縁があるけど、それ以上にモテる男にも縁があるって。だから異性としての自分に関心をもつていなか直ぐに分かるんだそうですよ」

それを感じた時点で功才君にとつて、ミントという女性はシャインから預かった女性で、戦略の一つでしかないでしょうね。

功才君が、自分から必要以上に親しくはしないでしょうね。

s.i.d.e 功才

ミントさんは旅をする上で約束を決めた。

生活費は自分持ちとする事。

ミントさんは、実家とシャイン様から結構な金額をもらつたみたいだし。

宿は別として、依頼も個人で受けてよい。

貴族や騎士が泊まる宿には俺は止まれないし、そんな金もない。

夜にしなきや依頼は、1人でした方が面倒くさくないし。

それぞれ目的を達したと思つたら、相手に話して帰つても文句は言わない事。

早い話、ミントさんは旅が辛かつたら、いつでもお帰り下せこと。

ちなみに俺はシャイン様から、身分証明書をもらつた。

シャイン・マクスウェルの前においてコウサ・ザイツの身分を証明する。

またコウサ・ザイツはマクスウェル家の知己であり、マクスウェル家の許可なく危害を加える事を禁ずる。

これががあればマクスウェル家の領内なら、フリー・パスだし、ミント絡みで貴族や騎士に絡まれる可能性は低くなる筈。

後はブルーメンまでの旅の道中で、ミントさんの戦力を把握しておこう。

◆ パリマントの旅 1 旅の開始（後書き）

指摘感想お待ちしております。

◆ パソコンへお問い合わせ（前書き）

徐々にお気に入り登録や感想も、もりえていきます。
感謝に及きません

ガーディアンのパソコン退治

side 功才

「コウサ君、す少し休まないかい？朝から歩きっぱなしじゃないか（朝からって、まだ昼前だろ？騎士だから普段は馬で移動しているんだろうな）

「もう少し頑張るつすよ。ミントさん野宿したくないつすよね？」

「でも、今魔物と遭遇したら僕は実力を発揮できない自信があるんだけど」

「街道に魔物ができる確率は低いし、満を持した実力にも期待はしてない。

「その時は俺が一人で戦うつすよ」

「コウサ君、あれだろ。君は好きな女の子に意地悪をするタイプなんだろ？」

「残念ながら外れつすよ。それに俺はシャイン様と張り合つ氣もないつすから。」

「な、何でそれを知っているんだい？コウサ君は人の心が読めるのか？」

ミントは顔を赤らめて、慌てふためいている。

「シャイン様にバラして欲しいんなら、歩くつよ」

「君は純粋な乙女心を利用するのかい？」

「利用できる者は何でも利用する主義なんすよー」

「口ウサ君の、鬼、悪魔、ゴブリン、オーク。相手は優しくってものが無さ過ぎる」

「ミントの荷物を半分以上もって、歩く速さをあわせてこるのは優しさじゃないと？」

「分かってくれて嬉しいです。それだけ喋れたら元気な証拠つす

「わかったよ。僕はこれから無口でおじとやかな乙女になるわ」

.....

「口ウサ君、やつぱりコロニーーションは大事だよね」

「無口みじかっー。」

「ミントの無口は一時間しか、もたなかつた。

そんなやり取りをしながら、ブルーメンまで後少しどつたある日の事。

「ミントさん体力は大丈夫ですか？」

「突然どうしたんだい？どこかの鬼冒険者のお陰で、可憐な魔術騎士はすっかり体力騎士になってしまったよ」

「それなら安心っす。馬車がゴブリンに襲われているから助けるつすよ」

「君が依頼じゃない人助けをするなんて僕は信じれないよ」

「いいで見捨てたら悪評がたつつからね」

「納得だよ…」

馬車を襲っているゴブリンは5匹か。

ゴブリンは鉄の槍や鉄の剣で、馬車に攻撃している。

「ミントさん、俺が合図したらサンダーを畳えて下さい。お願ひするつすよ」

「でも僕のサンダーは気紛れ屋さんだから、ゴブリンに当たらぬかもしれないよ？ってコウサ君、小石を拾つてゴブリンにぶつける氣かい？」

「俺の魔法には下準備が必要なんすよ」

先ずは、ゴブリンとの中間に拾つた小石をぶちまける。

「ストーンレイン」

哀しいかなストーンレイン。

下準備をしなきゃ、3粒の小石の滴になってしまつ。

「ハウサ君、ゴブリン達まったく無傷だよ。それどころか怒って標的を僕達に変更したみたいだよ」

「馬車から引き離す為だから当たり前ですよ」

次は

「プチサンダー」

狙うはゴブリン達の武器。

これでゴブリン達の武器は帶電状態になる。

「ハウサ君、威力がプチな雷の魔法で、ますますゴブリンさん一行がお怒りだよ。君は女の子の気持ちだけでなく、魔物の気持ちも逆撫でする名人なんだね」

ゴブリン達が、武器を掲げる。

「ミントお嬢様、サンダーをお願いします」

「お、お嬢様？わかったよ。雷のマナよ、その閃光で敵を焼き飛ばせ。サンダー！」

ミントの放ったサンダーが、ゴブリンに直撃する。

即席避雷針に、何とか当たつてくれたみたいだ。
ゴブリンも無事？全滅した。

「す、凄いよ。」「ウサ君、僕のサンダーがマトモに当たつたよ」
正確には帶電した鉄の武器に誘導されたんだけどな。

「それがミントお嬢様の実力ですよ」

「コウサ君、先からどうしたんだい。大声でお嬢様なんて？」

そりや、馬車の人達が俺に注目しているからねー。

馬車の中から人が降りてくる。

人数は8人。

服装はバラバラな所を見ると乗り合い馬車かもしれない。

商人風の中年とその従者と思われる若い男。

3人連れの親子。

少女が3人でまとまっているのは友達同士だからか。
3人とも美少女と呼んで差し支えないだろう。

癒し系の茶色のロングヘア。

理知的な水色のショートカット。

赤髪の勝ち気そうなポーテール。

あの中で使えるのは商人と3人娘だな。

予想通り最初に近づいてきたのは商人風の男。

「危ない所をありがとうございます。私はブルーメンで商売をしているハツサンと申す男です」

「皆様幸運ですよ。ゴブリンを退治したのは、何とあのシャイン・マクスウェル様にお仕えしている魔術騎士のミント・プロッサムお嬢様なのですから」

計算通り8人の視線はミントに注がれる。

3人娘はシャイン・マクスウェルの名前に反応して黄色い声を上げていた。

(よつし、これでゴブリン退治の手柄はミントにの物になる)

しかし1人だけ、コウサに視線を注いでいる人がいた。

side ロック

「功才殿はゴブリンを退治しましたが、手柄は全てミントの物にす
る様です」

「流石は私の弟子ですね。自分の実力を上回る名声は身を滅ぼしか
ねますからね」

「しかし、冒険者は名を売る者ですが」

「功才君はね、有名になる怖さを身に染みて知っているんですよ」

この手柄でミントが満足して帰ってくれるのが、一番ありがたいの
でしょうナビ。

パルマーハートのパクン退治（後書き）

いよいよメインヒロイン登場するかも？
指摘感想お待ちしております

ザ「」の天敵？（前書き）

なんとお気に入り登録が300を超えて日刊ランキング11位になつてました。

そしてメインヒロイソンの登場です。

ザコの天敵？

side 功才

ミントを乗せて走り去つて行く馬車を見送る。
笑顔で。

(あんな騒ぎに、巻き込まれてたまるかつーの)

たかがゴブリンとはいえ、馬車に乗っていた8人からすれば、命の
恩人。

そのお陰でミントは、英雄扱いされていた。

親は子供の命も救ってくれた恩人だし。

商人達や3人娘はシャイン様との繋がりを持ちたいからだろう。
一緒に馬車に乗つていつたら、俺まで英雄扱いされて割に合わない
依頼を持ち込まれかねない。

まあ、しばらくは周囲も英雄と持ち上げてくれるかもしれない。
でも一度ついた英雄のイメージを壊す事をしたら世論の袋叩きにあ
う。

特に俺みたいな戦い方なんて格好の標的にされてしまう。
これからミントと行動する時は名譽をミントに集中させておく、そ
うしたらシャイン様がミントを連れ戻す確率が高くなるし。
有名になつた配下の魔術騎士を、いつまでも冒険者にしていたら世
論が納得しないでしょ。

ミントの荷物も無くなり、心も軽くなつた俺は軽やかなステップで
ブルーメンを目指す。

ウキウキで着いたブルーメンはやたらに派手な街だった。

この世界でも、エンターテイメントには虚偽威しが付き物つてか。それらしい雰囲気で見る演劇や歌劇は、魅力を倍増させるんだよな。自分にあつた慎ましい宿屋を訪れた俺に先までのウキウキを消し去る事実が突きつける。

「1泊1万デュクセン? まじ? むり! -」

ちなみに現在の所持金は30万4千521デュクセン。

ブルーメンは人気の観光地、宿がしょぼくとも宿泊費は高いらしい。

(宿ビデウスツカナ。……ここは芸術の街だよな。それならあれがあるかもしねえ。ギルドで紹介してもつか)

それで訪れたブルーメンの冒險者ギルド。

ここ酒場じゃねえよな。

ブルーメンの冒險者ギルドは、真っ赤な外壁に金色の文字でブルーメン冒險者ギルドと書かれた看板を掲げていた。(まあ、こんな街じゃ冒險者ギルドが街並みに合わせなきやつていけないか)

「すいません、紹介状を持つてきた者です。ちょっと相談がありまして」

ブラングルの冒險者ギルドを上にシャイン様の紹介状を下にして職

員に手渡す。

「…どういった用でしょうか？」

「安い下宿を紹介して欲しいんすよ。この街にならあるつすよね？俳優や芸術家の卵が暮らす安いやつが」

「紹介状の割に、せこい頼みだな

「ギルドに保証人代わりになつて欲しいんすよね。紹介状はその保証つすよ」

「1ヶ月4万デュクセンの下宿屋を紹介してやる。後依頼はきちんと受けとれよ」

「ここが、まあ観光地で4万じゃこんなもんだろ。下宿屋はブルーメンの町外れに建つていた。

異世界で昭和の香りがする建物会えるとは思わなかつたが。部屋は六畳一間な感じだし。

まあ毛布でもあれば十分生活していくそうだ。

そう言えども、こっちの世界にも引っ越しソバつてあるんだろうか？そんな事を考えていたいたら扉をノックする音が聞こえた。

「今日引っ越しをしてきたんだよね。私は隣に住んでいるメリー・ブルングだよ。よろしくねお隣さん」

勝手に扉開けたらノックの意味ないじゃん、でもこのメリーって娘

どこのかで見た気が。

「あつ、あつあー。ミントさんと一緒にいた男の人だ。メリーは君に会いたかったんだよ。奇跡だねー」

あの3人娘の1人だ。

茶髪の癒し系だ。

「確かに私は、ミントお嬢様とは一緒にいたんですけどが、なぜ私なんかに会いたいんっすか?」

「それはだねー、君が演技が上手いから。メリーは女優さんを目指しているからわかるのだつ」

いやだ、メリーは俺が一番苦手とするタイプだ。

「演技なんてしてないっすよ」

「ダメー、メリーに隠し事は通用しないのつ。だって本当の従者なら荷物を全部持つ筈だもん。メリーは演技の為に人間觀察してるからわかるの」

「それは偉いっすね。それでは私は毛布とかを買ひに行くっすから。これで」

「毛布? それならメリーが案内してあげる。君とメリーはもうお友達なんだから遠慮しないでいいよ。それで君の名前はなに?」

「コウサ・ザイツ、冒険者つすよ。やつぱりメリーさんに悪いから遠慮してくれますよ。ほらメリーさんに彼氏がいたら悪いっすから」

メリーは美少女だ。

多分、彼氏が好きな男がいるに違いない。

「ざとねーん。メリーに彼氏はいません。それじゃ「ウサ」とメリーの初デートにしあわばーつ

「俺の話を聞けつてばー」

「それが「ウサの本当の喋り方なんでしょう? すーとかはわぞとなんだよね。うん、会つて直ぐに打ち解けれるなんてメリーと「ウサは、絶対に仲良じわんになれるよ」

side ロツキ

「あの功才君が、ペースを崩されましたか」

「ええ、とても腹芸ができるタイプに見えませんでしたが」

「だからですよ。功才君は打算のない好意に弱いんですよ」

これはラッキーですね。

功才君が、この世界に好意を持つてくれるかもしません。
自分の生まれた世界を捨てゆくじいこね。

ザコの天敵？（後書き）

功才是人の裏をよむタイプですから、メリーミたいに裏表がなく好意的に接してくる女の人が苦手です。

嬉しいから苦手なんです、自分のペースが保てないから。感想指摘お待ちしております。

メリーの細かい容姿は次話で

ナニヤメニー・スリーハンテ(前書き)

昨日 アップしようとしていたら寝てました

メリーピンク

メリーハーのパーソナルカードを見せてもらつた。
てゆうか見せられた。

名前

メリーピンク

種族

人間・猿人族

年齢

15

身分

一般市民

職種

女優の卵

メリーハーの身長は160?くらい。

長い茶髪に白い肌、少し垂れ目で愛嬌のある美少女。
なによりの特徴は、立派すぎるその胸。
その美少女が何をすき好んでか俺と一緒にいる。

不思議だ、謎だ、有り得ない。

「ねえねえ、コウサは何であんなに演技がうまいの?でも、あの
つすつて言葉遣いはメリーハーの前では禁止だよ」

「俺の家族は俺以外は全員現役の役者なんだよ。だからよく台本読み合いでいたからじゃないか」

家で暇なのは俺ぐらいだし、家事か台本読みぐらいしか役にたってなかつたし。

「それじゃ今度メリーにも台本読み合いでよ。コウサお願いー」

「暇ならな。でも言つたら？俺は冒険者だから暇は少ないかもな」

「冒険者かー。ねつ今度メリーも依頼に連れて行つてよ。冒険者の役を演じる時の参考にしたいし」

「ゼッ一たい駄目。依頼は命懸けなんだからメリーには無理」

「いやーだ。それに私は『』が得意なんだよ。お父さんが獵師だったから仕込まれたの」

「だーめ。怪我したらどうすんだよ。女優が顔に怪我したら終わりだぞ」

「いやーだ、絶対について行くんだから。もし怪我をしたらコウサに責任とつてもらつてしまつたし、

「コウサなら絶対にメリーを守ってくれるって信じてるから」

(ちつ、口ではメリーに勝てないか。それなら内緒で依頼を受けりや問題ないな)

「もしコウサが一人で依頼を受けたりしたら、コウサのお部屋の前で、ずっと泣いてやるんだから。メリー泣く演技は得意なんだからね」

「だー、わかったよ。でも条件がある。依頼中は俺の指示を聞く事、それと依頼中の俺の口調に文句を言わない事」

何回か怖い目にあえればメリーも諦めるだろうし。

「さつすがコウサ。素直にコウサの言つ事を聞くし、口調はむしろ嬉しいよ」

side ミント

腹が立つ。

僕とシャイイン様は進展どころか、ずっとーーーと会えてないのに。待ち合わせ場所にコウサ君が女の子を連れて来てイチャイチャしてるんだよ。

それにはあの女は、僕の敵だ。

「コウサ君、その娘は誰だい？僕は別に君の色恋に関心はないけども、これから依頼を受けに行くのに、あまり感心しないな」

「あー、この人はメリータンツ。俺の住んでる下宿屋のお隣さんで役者を目指しているんすよね。それでこないだ大活躍したミントさんの腕前を見て演技の幅を広げたいらしいんすよ」

「それなら納得だよ。こんな可愛い娘がコウサ君なんかと色恋沙汰

になる訳がないんだからね

(「コウサ、コウサ。ミントさんって、もしかして胸も残念な人なの
?)

「今、今いーまー。

僕の纖細で傷つきやすい胸を馬鹿にしたな。君みたいな娘にわからない
ないんだ。僕達みたいな努力が身を結ばない胸をもつた乙女の気持
ちが」

「そつちが先にメリーとコウサの仲良しさんを疑つたのが悪いんだ
よ。それにコウサは魅力的な男性だよ」

「僕にはコウサ君の男性的な魅力はわからないね。いいさつシャイ
ン様は、きっと僕みたいな可愛らしい胸が好きなんだから」

「そう? 残念胸ねえーにならなきゃいいね」

「それを言うなら残念無念だろ? それとおあいにく様、最初から僕
に胸なんてないんだよ。……って誰が胸なしだっていうんだい」
いいさ、戦闘のプロ魔術騎士の僕が実力を見せつけてやる。

side コウサ

巻き込まれないで良かつた。

ブルーメンの依頼はつと。

ジャアントシープ、傷が少なければ30万デュクセン?

何この高額依頼は。

「ジャヤントシープの毛は貴族に珍重されているし、腸はバイオリンの弦に使われるんだよ。お肉も皮も売れるみたいだよ。メリー物知りでしょ？」

「メリー さすがっすね。良く勉強してるんすね」

「くわ、『ウサ君。羊を数えると夜に寝やすいぞ。どうだ』

といつあえずミントは置いといて

データタボール参照

ジャイアントシープ

体長最大4m近くになる巨大羊ですよ功才君。その角を使った破壊力は凄まじく岩も碎くそうですよ。

ちなみに羊の目は、結構怖いんですね。

ロッキ師匠、俺達の会話を聞いてないよな？

ナラヒメニー・スリーハー（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコヒメニー センタリ（前書き）

依頼料に関する指摘があり改訂しました。
興味のある方は活動報告で確認して下さい。
そして何とザコが日刊ランキング2位となりました。
正直驚きと感謝が隠せません。

ガウサとメリーサンと羊

side 功才

「ガウサ、ゴブリンって安いね。一匹2千デュクセンだよ」

「仕方ないっすよ。ゴブリンは繁殖力が強いから巣を殲滅させるのが基本なんすよ。精靈魔法や集団魔法で1回で倒すのが基本みたいですよ。冒険者より宫廷魔術師が担当してるみたいですね」

冒険者が担当する場合は、ギルドから直接依頼される事が多いらしい。

「ふーん。ヒュウでガウサはジャイアントシープを倒す方法を思いついたの？」

「メリーザの協力が必要っすけどね。…後ミントの協力も」

「ガウサ君、メリーザ仲良くなつてから僕の扱いが酷すぎないかい？僕は今回の依頼はバスさせてもらうからね」

「今回の依頼がうまくいったら、メリーザあの劇のチケットを手に入れてくれるそうっすよ」

ミントが見たがっていた、貴族と女騎士の恋愛劇は人気の為、今だにチケットが手に入っていない。

「メリーザ、君は何て素晴らしい女性なんだ。さあガウサ君、指示をだすんだ」

「先ずは矢を買いに行くつすよ。できるだけじつにヤツが欲しいつすね」

それで清水の舞台から、飛び降りる覚悟で買いました。
鉄の矢お値段10万デュクセン。
当然、一本のお値段。

ジャイアントシープを見つけた。

ただいまお食事中らしい。

草原に4mの羊がいるんだから、遠くからでも田立ちまくる。
しかもめっちゃ低い声で鳴いていた。

ええ声芸人ならぬええ声羊。

通訳すると

「不器用ですから」

とかに、なりそつながらに渋く威圧感がある。

「コウサ君、言われた通りに木の柵を設置してきたけど、あんなでかい羊に効果があるのかい？」

「細工は流々、仕上げを」覗じろってね

「コウサ、弓の練習もバツチリだよ」

「さすがは獵師の娘。それじゃジャイアントシープ退治に行くつすよ」

先ずは

「ミント、ボムをお願いするつす。できたらジャイアントシープの顔辺りで」

「わかつたよコウサ君。大氣と火のマナよ。力を合わせて敵を弾け飛ばせ。ボム」

メリーガ射るのは、予めライトウェポンをかけておいた鉄の矢。突つ込んできたカウンター効果もあり、鉄の矢は見事にジャイアントシープの額に突き刺さった。

でも、まだ終われない。

ミントが設置した木の柵に向かって

「シールドボール」

ジャイアントシープは、ズゴンッと、でかい音をたててよつやく止まつた。

「コウサす、凄いよ。本当に私達だけでジャイアントシープを倒しちゃつた」

「どんなにでかい生き物でも額を貫かれた終わりつすよ。あつミントちよつと剣を貸して欲しいつす」

俺はジャイアントシープの額から、貴重な鉄の矢を引き抜いて、代わりにミントの剣を刺した。

「ちょい、『ウサ君、何をするんだい？ジャイアントシープ』もひ死んでるだろ？」

「ひつしておけば、ギルド職員が傷痕を見た時にミントの剣で倒されたって思つてくれるんですよ」

「『ウサ君、発想が殺人犯だよ』

俺とメリーは並んで、ミントが見たがっていた劇を見ている。ちなみにミントは俺達より前の席にいた。

「この劇はね、200年ぐらい前に実在した人がモデルになってるんだって。名前はローズ・ブロッサム」

「ブロッサム？それじゃミントの？」

「うん、『先祖様。ローズ・ブロッサムは活躍をして本当に貴族のお嫁さんになつたんだよ。それからブロッサム家では女の子が生まれると花の名前をつける様になつたんだって』

「だからミントの奴、必要以上に騎士ぶつっていたのか

大して強くない癖に無理をしてたんだろう。

「『ウサと一緒にだね。自分を偽る為に言葉まで変えて』

「違うよ。俺のは自己保身の為さ。ミントは周りの期待に応えよう

と必死だつたんだろ」

「ハントもさ、この劇みたいにハッピーハンドになれたら良いね」

「なれるか。多分シャイン様はハントで本当の強さを知りて欲しくて俺に動向させたんだろう」

後は、シャイン様の周りも納得するべくハントの評価をあげてみせる。

ガーリヒマーさんと半（後書き）

幕間で、功才がいなくつてた周囲の反応とかも書いてみたいですね。
指摘、感想お待ちしております。

今の目標は、二次で書いた曹仁伝を越す事です。

ザ「ヒトセガレ」の氣持ち（前書き）

なんとザ「ヒトセガレ」が日刊1位になりました。
いいんだらうか？
今回はちと暗めな話です

ガウとそれその気持ち

side リンタ

僕とガウサ君が一緒に冒険者ギルドに行つた帰り道の事。とても、面白いものを見つけた。

(うふ、こつもガウサ君にやられっぱなしじゃ悔しいよな。たまにはギャフンと言わせてやうつ)

「ガウサ君、見たまえ。あそここいるのはメリージャないか?」

そこにいたのはメリーと演劇仲間だと思つ。

全員が見事に美男美女のグループだ。

(あれを見たら流石のガウサ君も悔しがるに違いない)

「あつ、ちつすね。それじゃ俺は道具屋に行くつすから。これで「ちよつ、ちよつと待つたー。挨拶に行かないのかい?」

「特に用事はないですよ。それに友達といふ時にわざわざ挨拶に行くほど仲良くもないですから」

「いやいや、君はメリーが格好良い男の人といて何とも思わないのかい?」

「俺があの集団に混じつたりどつなるかを考えたら行動は簡単つす

よ。気づかないふりしてスルーするのが一番なんですよ。

「こやこやこや、意味がわからなこよ。」

「道端の小石が宝石に混じつてどうあるんすか？傷つくか笑い者になるだけですよ」

「絶対に傷つくのは宝石の方だと想つよ。むしろ小石が宝石を粉々に砕いてしまう氣があるよ」

「碎く？そんな事をしたら俺も傷つくじゃないっすか？それに俺は自分からは危害を加える氣はないっすよ」

「もし、あの中の誰かが君にケンカをついたらどうするんだい？」

「とりあえず相手の拳にライトウェポンをかけて殴らせるんですよ。でプチスタンをかけて逃げるっすね。それでシャイン様の紹介状を持つて、そいつのパトロンをしている貴族の所に行くっすよ。貴方がパトロンをしている俳優を使って俺を殴らせたとシャイン様に話してもいいですか？って言つんすよ」

「シャイン様の紹介状をそんな事に使つなんて。早く道具屋に行きたまえ」

「功才君、キミは自分じゃなく持ち主に宝石を碎かせるんだね。彼は一体どんな生活をしてきたんだろ？」

あの夜から功才さんは依然として行方不明です。

三条財閥の力を使っても不明。

勇牙さんが暴走族のお友達に探させても行方はつかめていません。

功才さんの家族に聞いても、祖父の所に行つたとしか答えてくれないです。

功才さんはお爺様、お婆様が大好きだったから、そこは真っ先に財閥が調べていますのに。

「小百合、功才は勝手に居なくなつただけですよ」

「隼人さん、私は唯も心配なんですよ。唯さんは功才さんがいなくなつたキッカケは自分だつて、『自分を責めてるんですよ』

「功才の先輩に、あんたらでもザコの心配ができるんだなつて言われたみたいですね」

side 財津栄才

馬鹿息子が行方不明になつて2ヶ月近くになる。

今の所はマスコミにもバレていない。
いやバレたらまずい。

実の息子の行方不明を、バイト先の先輩から言われて気づいたなんてマスコミにバレたら、私の主演映画も妻美華のCMも長女栄華のドラマも次女美才のCDも全てなくなるかもしれない。
いっぽ、死体でも出してくれたら悲劇の父親になれるのだが。

side 山田先輩

ザコの野郎、帰つて来たらタダじやおかねえからな。
人にこんなに心配をかけさせてよ。

でも正直、あいつが帰つてこない気持ちもわかる。
幼なじみの3人は唯つて女の心配しかしてないし。
父親に至つては俺に言われて気付く始末。
本気で心配しているのは俺とあいつの爺さんと婆さんぐらい。
ザコのクラスの連中は急きょ転校したつて説明をされていたし。
母親と姉妹は話を、してないからわらかない。

あいつが、親しい人間を作らなかつた理由が分かつた気がする。

side 功才

メリーは誰にでも優しい。
メリーは誰にでも明るく笑いかける。
メリーには、イケメンの友達がいる。
何回も何回も、頭の中で繰り返す。
ザコが美少女に恋して、どうする?
無駄な努力はもうしないって、決めたじやないか。
俺がメリーみたいな素敵で美しい少女に好かれるなんてのは、思い上がる
つた勘違いなんだ。

くだらない。

side メリー

この人達は、口を開けば自分の魅力が、三文芝居みたいなセリフしか言えないのかな。

コウサの爪の垢でも飲ませてやりたいよ。

コウサは口では、実力にあわない依頼を受けたくないから、有名にはならないなんて言つてるけど、本当は人をガツカリさせたくないんだと思う。

そしてその為に、必死にみつともないぐらにあがく。
あがいてあがいて手に入れた名譽を簡単に人にあげちゃう。
だから誰もコウサのあがきに気づかない。

だつたら、私が隣で見てあげたいな。

ううん、違う。

私はコウサと旅をして色々な物と一緒に見たいんだ。

ザ「」とそれをの気持ち（後書き）

こんなザ「はどうでしょ、つか？」
指摘感想お待ちしています

や「と墨跡からのお祝い？」（前書き）

久しぶりにロッキ師匠と功才が絡みます

ザ「と島田からのお祝い？」

side ロツキ

「そう言えば功才君と例の彼女はどうなりましたか？」

「功才殿はメリーエー殿の周りにいる美男子に引け目を感じている様でして」

「いけません。せっかく面白くなつてきたのに功才君は何をしているんですか？ここは可愛い弟子の為に私が一肌脱いであげしきう。最悪振られた功才君で楽しめますし」

side 功才

メリーエー出掛けたみたいだな。

俺はメリーエーが出掛けたのを確認して、絶対結界から出る。

絶対結界の中にいる限り、外から俺の気配を伺う事はできない。
まあメリーエーが俺の部屋の気配を伺つてなかつたら、ただの痛い自惚れ屋なんだけど。

「功才君情けない、なっさけないです。君は何をしてるんですか。
私が折角教えてあげた絶対結界をこんなネガティブな使い方をする
なんて」

「へつ？師匠。なんでここに？どうから入ってきたんすか？つか部屋では靴を脱いで欲しいっす」

「そんな事を言つるのは君たち日本人だけですよ。いえね可愛い弟子

が片思いをしているみたいですから、師匠としては応援してあげたくて、つい来ちゃいました」

「応援って何をするつもつりますか?」

「新しい簡易魔法をあげますよ。名付けてアローファクトリー、あらゆる物質から矢を作り出す魔法です」

「お約束で作り出す条件があるんですね?」

「さすがは功才君、あくまで君の力で加工できる物質のみとなります。だから金属は諦めて下せー」

鉄の矢を作るのは無理と。

「どうぞこじみ、」Jの魔法は使つ機会はないと思いつつですよ

「功才君、美男子に彼女を取られていいんですか?」

師匠に何で知つてると言つ質問はしない。
この人に常識通用しないし。

「男の魅力でいったら、俺はゴブリン級で向こうはドラゴン級なんすよ。かなう訳ないじゃないつすか」

「それは一般論でしょ? 一般論がどれだけ、あやふやな物か分かるでしょ?」

「一般論が通じない師匠が、それを言つますか。そんな事より師匠、シールドボールはどれ位までの攻撃に耐えれるんすか?」

「大抵の攻撃には1回は持ちますよ?どうかしましたか?」

「いやシールドボールに魔物を閉じ込めて窒息死狙いはできるのかなと思つたんすよ」

「駄目です。そんな闘い方したら、私がつまんないじゃないですか。そんな事できない様に魔法を書き換えちゃいますよ。…これで、ただ窒息死を待つていたら自然にシールドボールは消滅しますからね」

言わなきゃ良かった。

「それで師匠、応援つて何をしてくれるんすか?」

「やだなー。弓を使う彼女と旅をする時に便利な魔法をあげたじゃないですか。功才君、頑張つて下さい。君の優しい師匠は何時でも遠くから見張つていますからね」

そういう終えると師匠は消えた。
転移魔法つてやつだろ?。

いや、いや、そんな俺は弓矢使えないのに、こんな魔法くれても。それに俺が加工できるつて言つたら砂とか? サンドアローなんて弱いに決まつてる。

考へても仕方がない、冒険者ギルドに依頼を見に行くか。

冒険者ギルドの前には、今1番会いたいけど会いたくない人がいた。メリード、ギルドの壁にもたれかかって誰かを待つている様子。

この後の行動選択肢

1・引き返す

2・自然な挨拶をして中に入る

3・気配を殺して気づかないふりをして中に入る

……3だな。

目線は地面、考え方をしている様な表情を浮かべながらギルドに向かうべし。メリーの横を通り過ぎ様としたその時。

「良かった、良かったよー。やつとコウサに会えた。コウサ助けて、メリーのお友達が大変なの」

涙目で俺に抱きついてくるメリー。
さすがに逃げれないよな。

「それで友達がどうしたんすか？」

メリーは一瞬表情を強張らせたが、話を続けた。

「メリーと一緒に演劇をしている人達がね、今度の舞台の参考にするからって近くの古い階に行つたの」

「今度の舞台は、その階で起きた話なんすか？」

「うん、昔その階で悲劇的な死を遂げた将軍がいたの。みんな実際に現場を見るのが必要だからって行っちゃつて」

「その階はこわく付きなんすね」

「幽靈とか魔物ができるって噂があるんだよ。メリーはジャイアントシープと戦つて魔物の怖さが身に染みたから、みんなを止めたんだ」

「でも行つたんですね。……わかつたす、俺に任せやるつよ」

メリーアのあの涙は、どの男に対するものか分からぬけれども、こうなりやとことんピ上口になつてやる。

side メリー

こないだミントに言われたんだ。

「コウサ君は多分メリーアの事を好きだと思つた。でもコウサ君は自分に自信がない様でメリーアの役者仲間に引け目を感じていたよ。僕はコウサ君には感謝をしているんだ。だから君に、その気がないんなら、もうコウサ君に構わないで欲しい」

「コウサ、誤解だよ。

コウサは私が、あの中の誰かの事を好きだと思つているみたい。それでも、コウサは救出に行つてくれるつて約束をしてくれた。それなら私も気持ちを決める。

皆について行つて、みんなに今後の事を宣言するんだ。

誤解はちゃんと、解かなきゃいけないし。

ナーフ魔匠からのお祝い?（後書き）

シールドボールに魔物を閉じ込めて窒息死させたら良一のでは、と
いつ意見を何通か頂きました。

作者も最初それは気付いたんですけど、それをやっちゃん必殺技
過ぎてザコじゃなくなる気がして、ロッキ師匠によるシバリにさせ
てもらいました。

指摘感想お待ちしております。

ガーデンのナメクジ退治（前書き）

新魔法が活躍します

ザーヴのナメクジ退治

s.i.d.e 功才

「やつぱりH口やめよーかな。

「あそこのはやばいのがいる。あの役者の卵達も早くしないことやばいかもな」

「な、何がでるんすか?」

「ゾンビスラッグだよ。かなり厄介な魔物だから討伐金額は50万デュクセン。役者の卵達のパトロンをしている貴族様から依頼が出てる」

データボール参照

ゾンビスラッグ

ゾンビに寄生していた肉食のナメクジが、闇のマナを溜め込んで魔物化しちゃったんです。

しかも、このナメクジ君は死体を次々と吸収して巨大化しちゃう厄介者、ゾンビだから普通の攻撃は効きませんからね。さあどうします?功才君。

「わかつたつす。この依頼を受けるつす。一つ聞きたいたがあるんすけども、この近くに…は、あるつすか?」

とりあえず、アンデットにはお約束の聖水（1つ1000テュクセンを20個購入）をバスケットボール大のシールドボールに閉じ込める。

後はあれとあれの、どうにしようか悩んでいると

「コウサ、メリーも一緒に連れて行つて。依頼受けたんだよね」

「友達を助けたいのは、分かるつすけども駄目つす。今回の魔物は見た目がやばいんすよ。ナメクジみたいなゾンビができるんすよ」

「コウサは一人で行くつもりなんだよね？絶対に駄目、誰が何と言おうとメリーが許可しないんだから」

「メリーの許可は必要ないんじやないっすか？」

「あるのー。コウサはメリーの大変な人なんだよ。皆に行つた人達よりも大事なんだから。メリーはコウサと一緒に冒険をしたくて待つてたんだよ！」

こんな風に言つてもらえたのは初めてだよな。メリーカからは逃げなくて大丈夫かもしねない。

「分かった、分かったから。その代わりにきちんと仕事をしてもらうからな」

「うんっ。やつといつものコウサの話し方になつたね」

「メリーカが来てくれるなら、後は買う物は塩とおがくずと油だな。それと途中で砂を手に入れていぐぞ」

「もう細工は流々なんだね」

「ああ、後は」

「仕上げを」」覧じる」

「何つーか雰囲気満点な階だよな」

古びた階は3階建てのレンガ造り。

ホーンテッドマンションならぬホーンテッド階。

「あつ、屋上にいるのがメリーのお友達だよ」

俺には人影にしか見えないがメリーには確認できたらしい。

「今は昼間だからゾンビスラッグはお口様を嫌つて屋上には来ないんだろうな。うつし、夜になる前に片付けるか」

その前に荷物から取り出した物を階の入り口に供える。

「コウサ、何してるの?ワインとお花?..」

「この階で悲劇が起きたんだろ?…そうゆう所にお邪魔する前には、きちんと仏様に挨拶をしておかなきゃ駄目だろ?..」

ビビリの俺の安心保険。

「ホトケサマ?..」

「その辺は通じないか。この依頼が終わったら教えるよ。それじゃお邪魔します」

俺とメリーが中に入った途端、バタンッと鉄製の扉が閉まった。
なんつーお約束な。

ゾンビスラッグが持つ闇のマナの力なんだろう。
これでメリーのお友達は逃げれなかつたんだな。

階の中は、これまたお約束に空気が濁んでいた。

「なんかカビ臭いね」

階の壁や床には、カビや想像をしたくない黒いシミがそこかしこにある。

「ゾンビスラッグが住み着いた所為で手入れが出来なくなつんだる幸いと言つか、1階には魔物の影もなく無事に2階への階段を上がる事ができた。

2階にあがり、広間の扉を開けると3m近いナメクジ、ゾンビスラッグが闇の中から現れる。

青黒い巨大なナメクジは、見た目がかなりきつく、死体を吸収しているから、さらにグロい。

だつて、ゾンビスラッグが動く度に、体のあちこちで吸収された人の顔も動いているんだぜ。

メリーの顔も青くなつてきたし、これは… サッサッと片をつけて、

寝るに限る。

先ずはリュクサックから聖水入りシールドボールを取り出す。それをゾンビスラッグに投げてぶつかる直前に

「マジックキャンセル」

聖水をモロに浴びて苦しむゾンビスラッグ。体が溶けだしてますますグロさがアップ

次は塩を取り出して

「アローファクトリー」

出来たのは塩の矢。

「メリーゲーム」硬さを確認しつつ、塩の矢をメリーに手渡す。

「ナメクジは動きが遅いから大丈夫だよ。まかせて」

メリーの手から放たれた白い矢がゾンビスラッグの体に突き刺さる。良かつた、無事に矢が崩れずに刺さってくれた。

どうやら木の矢ぐらいの威力はあるらしい。

塩の矢で闇のマナが浄化された為か、ゾンビスラッグの動きが止まる。

メリーが塩の矢で牽制してくれている間に取り出すのは、途中で手に入れた目の細かい砂。

当然、シールドボール入り。

ナメクジだけに、最初は塩を使うか迷ったけど皆の近くに細かい目

の砂があるのをギルドで聞いたから砂で代用した。

大量の砂を、モロに浴びたゾンビスラッグは体の水分を取られて縮み始める。

次に取り出した、おがくずに油を染み込ませて

「アロー ファクトリー」

出来たのは、中まで油がタップリと染み込んだ木の矢。

「メリー、俺が突っ込むと同時に射つてくれ」

「任せて。コウサ、無茶しないでね」

立て続けに6本の矢がゾンビスラッグの体に突き刺さる。

後はゾンビスラッグが体勢を立て直さないうちに

「スマールファイヤー」

俺はバースデーケーキの要領で木の矢に火を着けてまわる。油が染み込んだ矢は勢いよく燃え上がり、水分が無くなつたゾンビスラッグを瞬く間に火に包みこんだ。

「ふいー、何とか倒せた。

メリーは2階のお友達をよろしく。もつ少し、したらヒントが来る

「また手柄を譲っちゃうの?」

「(イ)の簪は、マクスウェル家の所有物なんだよ。今回は、殘念魔

「メリーガ屋上に行つて、しばりへすむヒントが一ヤーヤーしながら
広間入つてに来た。

何かむかつく。

「なんすか？」

「別になんでもないや。小石が宝石を助けたんだと思つたら面白く
てね」

「ハメルヒツクすよ。これは流れで、ヒツナツたんすか！」

side メリー

私達が降りてきたのを、察すると「ウサはすかせや」「ヒントさん」の後
ろに移動する。
どうからどうみても、ヒントさんの従者。
みんなが口々にミントさんにお礼を言つてる間も素知らぬ顔で頷い
てこる。

「ウサ、ヒトからはメリーをじ覽じる。

「ウサ、みんなはまだミントさんにお礼があるみたいだからメリ
ーと一緒に冒険者ギルドに行こ。メリーもギルドに登録をするから」

唚然とするみんなを尻目に私は「ウサの手を取つて歩きだす。
ウサは顔を真っ赤にしながら、口をパクパクさせていた。

「ウサ、かつわいいー

ガウのナメクジ退治（後書き）

「ウサとメリーが惹かれあつた描写が分かり難い」と指摘を頂き、
ただ今幕間制作中です。

幕間 メリーとサロ（前書き）

メリーガ「ウサに惹かれた描写が分かりづら」とい指摘を頂き搔きました。

無理やり感が否めない

幕間 メリーとガロ

side メリー

皆から出た後も、しっかりとコウサを確保しておく。
「コウサには色々と聞きたい事があるから逃げられない様しておかなく
ちゃ。

「せり、「コウサ一緒にブルーメンに戻ろう?」

「お、おっ! わかった

「コウサの顔はまだ真っ赤なまま。

「コウサ、私と初めて会った時の事を覚えていい?」

「メリーの乗っていた馬車がゴブリンに襲われた時だろ? 確か3人
組だったよな」

「正解。あの時のコウサすりつい冷めた目をしてたよね」

その時は手を繋ないただけで、顔を赤くするなんて想像できなかつ
たな。

「冷めた目? メリーそこから見てたのか?」

「最初はヤバい人だと思ったんだよ。でも気付いたらミントさんの

従者のフリをしてるし、終いには1人で歩いて帰つて言つから不思議な人だなつて興味が湧いたんだ」

今思つと違つ想いもあつたんだけど。

「それで俺が演技をしていると思ったと、開幕準備から見られたんじゃ仕方がないか」

「他の人は気付いてなかつたよ。私はゴブリンと戦つた事があるから、そんなに焦つてなかつたし」

「シャイン様の名前を聞いてハシャいでいたから、うまく誤魔化せたと思つたんだけどな」

「残念でしたー。友達への付き合いでハシャいでいたんだよ」

コウサが啞然としている。
うん、しつかり私のペースだ。

「その後にすぐ再会したんだよね。コウサが下宿のおじさんと話してゐる聞いてラッキーって思ったんだよ」

「ちょっと待て。そんな前から俺が隣に住むのを知つてたのか?」

「そうだよ。てつきりコウサも演劇関係の人だと思ってたから、仲良くなりたかつんだ」

「それじゃ何で冒険者ってわかった後も、親切にしてくれたんだ？」

「今はメリーやの質問時間だよ。それじゃ次の質問にいきますー。コウサは何で途中から私の事を避けたの？コウサに嫌われたと思つてメリーやしつゝ悲しかったんだからね。言葉も戻つつけつつ」

その答えはコウサが、ちゃんと気持ちを伝えてくれてからだよ。

「怖かつたんだよ。メリーやの周りは格好いい男ばっかりだから。俺がいる場所がない感じで、それに美男美女は苦手なんだよ」

「やうやく言えば、コウサって自分の話をしてくれた事ないよね？詳しく聞きたいた」

コウサは色々な話をしてくれた。

小さい時からお父さん達に必要とされなかつた事。

幼なじみ達に引け目を感じて距離を置いた事。

本当は違う世界の人間だつて事。

正直、ショックな内容ばっかりだつた。

コウサは自分の弱さも武器にしなきゃいけなかつたんだね。

「そつか。だからコウサは田立つの嫌いなんだ。ねえコウサは、いつか帰つちやうの？」

「わからねえ。師匠の条件もわからないし、こっちの生活も気に入つてるしな。向こうで俺がいなくなつて心配をしてくれているのは5、6人しかいないつて話だ」

「メリーはコウサがいなくなつたら嫌だよ。こないだ距離を置かれただけでも、あんなに悲しかつたのに」

「うー、悪かつたつて。いやじめん」

「メリーを今後一度と悲しませないつて誓つてくれるんなら特別に許してあげる」

「わかつた、誓ひよ。それよりメリー本氣で冒険者になるのか？」

「コウサと一緒にジャイアントシープを倒して思つたんだ。もつと色々な経験をしなきや演技もメリー自身も成長できないつて。旅をしながらコウサから向こうの世界の演技を教えてもらいたし」

一番の理由はコウサに一因惚れしたからなんだけどね。

でもコウサには、まだまだ教えない。

旅の主導権はコウサが握るんだろうけど、恋愛の主導権は私が握るんだから。

私はコウサが元の世界にも、違う女の人の所にも行かない様に繋いでる手に軽く力をこめた。

幕間 メリーとザコ（後書き）

次の話が3分の2ぐらいできていたから、繋ぐのに大変でした。
馬車の人間で1人だけ功才を見てたのはメリーなんで勘弁して下さい

ザムへの依頼（前書き）

今回は討伐依頼ではないです

ガウへの依頼

side メリー

「ちよつ。メリー手が」

街に入つても、ガウサのお顔は真つ赤なま。

「? ガウサ手がどうしたの?」

魔物が相手なら平然としてる癖をに、私に手を握れただけで照られて困惑しているガウサのギャップがおかしくてたまらない。

腕を組んだりガウサせびりながらやうんだろ?

大丈夫だと信じじてるけど、周りへの牽制を兼ねてガウサの手を握つたまま冒険者ギルトに入る。

「ガウ、女と手を繋ながらギルドに来るとほ出世したな」

「違つて、じゃなく違うんすよ。今回メリーが冒険者ギルドに登録したいから一緒に来たわけだ」

「それじゃガウサ、メリーがギルドに登録する間、寂しくてもひきもんと待つててね」

「それじゃ彼女さん、パーソナルカードをチェックさせてもひつよ。ガウちゃんと待つとけよ」

ギルドへの登録になるとパーソナルデータの私の職種がアーチャーに変わった。

ギルドの人たの話だと冒険者ギルドに登録すると、その人の戦い方で職種が変わるみたい。

それを見て依頼に適正があるかを判断するんだって。

「ねえ、『コウサの職種は何?』

「しばらく見てないからわからないな。きっと冒険者じゃないか?」

『コウサの職種は

小技師7級

「ふつ。何これ、『コウサにピッタリ』

「何だよ小技師って。しかも7級ってなんだよ。小技師だとマスターしても大技使えないの確定じゃね?」

「伝説の冒険者小技師コウサじゃ迫力ないよねー」

「何かこじんまりとした伝説になりそつだよ」

「そうだよねー。」

ジャイアントシープやゾンビスラッグは中級冒険者でも苦戦する時ある魔物なんだよね。

それをコウサみたいな初心者が倒すのは稀なんだって。

それなのにコウサは今だに殆ど無名なんだよね。

演劇仲間からも冒険者じゃなくミントさんの従者だって思われていたし。

s i d e 功才

ゾンビスラッグ退治から数日たつたある日の事。

俺はシャイン様から呼び出された。

シャイン様は、ゾンビスラッグがいた階の関係でブルーメンに來たらししい。

「コウサ、久しいな。今回は冒険者ギルドを抜きにしてコウサ個人に依頼をお願いしたい」

「有名になつたミントには頼まないんすか？」

「ミントは正直に話してくれたよ。手柄は全部コウサによるものだつて」

あの馬鹿正直、うまく誤魔化せよ。

「わかつたすよ。どんな依頼っすか？」

「デュクセン皇帝の御次男ルイス様の為にある蝶を捕獲して欲しい。蝶の名前はジュエルバタフライ」

「蝶なら騎士団に護衛をさせて見に行くの駄目なんすか？」

「ルイス様は生まれ付きお身体が弱くて外出は無理なんだよ。もう

すぐルイス様は7歳の誕生日がお迎えになれる。虫を好まれるルイス様に喜んで頂きたいのだ」

「質問があるつす、シャイン様は皇子様と親しいんすか？それと何故虫が好きだつてわかつたんすか？」

「私はお話相手を勤める事が度々あるのだ。皇子の部屋には昆虫の図鑑が沢山あつて、ジエルバタフライの話もよくされておられる」

もし、騎士団を動かしたらどうなるか考えてみる。

確実に領民のヒンシュクは買つし、騎士団の中には虫探しを不名誉と捉える人も少なくないだろう。

シャイン様は皇帝への忠義が厚い方だ。

わざわざ皇帝の名を貶める手段は選ばないだろう。

それに他の貴族にばれでもしたら、ご機嫌取りの為に様々な虫が献上されるだろう。

毒虫が献上される可能性も否定できない。

「わかつたつす。幾つか用意して欲しい物があるつす

「受けてくれるか？くれぐれも内密で頼む」

データボール参上

ジュエルバタフライ

森の宝石と呼ばれる蝶ですね。

森の奥深くに住み人目に触れる事は少ないみたいですねー。
特徴は宝石の様に輝く羽を持っているんですよ。

宝石と言えば、功才君は、可愛い彼女にプレゼントは贈りましたか？

データボールが、無駄な方向にハイスペックになってしまっている気がする。

「メリー、ジュエルバタフライって見た事ある？」

「もうコウサ、忘れたの？メリーは獵師の娘だよ。ジュエルバタフライは子供の頃によく捕まえたよ」

やつぱり獵師の娘だけあって、森には詳しいんだな。

「メリー、シャイン様からの依頼に協力してくれ。依頼内容はジュエルバタフライの捕獲だ」

「ジュエルバタフライがいる森までだと片道3日はかかるねー。いきなりお泊まりの誘いなんてコウサったら大胆」

「ちつ、違つて。そんな掛かるなんて知らなかつたし」

「えー、コウサはメリーと旅に出たくないの？ショックだなー」

「違う、違うって、絶対にそんな事ないから。むしろ幾らでも一緒にいたいぐらいだし。あつ」

「キヤーッ。」「ウサつたら大胆。うんつ、メリーも依頼に協力してあげる」

多分、この先ずっと俺とメリーの力関係は変わらない氣がする。

「そ、それじゃ依頼内密の詳しい話をする。……じょりと囁く

「さっすがコウサ。それならメリーは絶対不可欠だよ」

「頼む。それなら旅の準備をするか」

「森に行くのなら足元の装備はきちんとしなきゃね。それと虫に刺されない様に厚手の服とズボンも買わなきゃ」

虫と言えど馬鹿にするなれ、どんな病原菌を持つてているか分かつたもんじやない。

服装は探検隊みたいな感じが良いだろ？

森の中で鎧なんて着ていたら邪魔なだけだろ？し、ましてゲームに出てくる女性キャラみたいに太もも丸出しだとお好きなだけ刺してて下さいだ。

ザ口への依頼（後書き）

指摘感想お待ちしております

ナレーターの準備（前書き）

今回は少し短めです

ザーハとメリーの準備

s.i.d.e 功才

「メリー、森にはどんな魔物が出るんだ？」

「森では魔物より獸に気をつけなくちゃ。熊なんてパンツを餌にするくらいだし」

「森の中では、スマートファイヤーを使いながら進むか」

「山火事になるから禁止。森の中ではメリーの指示に従う事。わかつた？」

フランクショウって言えば良かつた

「ヒーリーの森の事は、全然分からないからむしろお願いしたいぐらいだよ。それでメリー先生何を買つたらよろしいでしようか？」

「何日も潜る訳じゃないから、そんなに必要なことよ。食料・雨具・テント・弓矢・塩・飲み水・ナイフ・香辛料ぐらいいかな」

「飲み水はあるから大丈夫だけど、塩とナイフ・香辛料つてまさか……」

「鹿とかウサギ美味しいんだよ。心配しなくてもメリーが捌いてあ

げるから。ねつ子^{「」}兎^{「」}

「メリーさん、なんか最後の発音が違つんじゃないかーな」

「気にしない、気にしない。久しぶりに子兎シチューも食べたいな」

「ははっ、メリーは兎を捕るの得意なんだ」

「得意だよ。浮氣なんてする悪い子兎を見つけたら直ぐに射つやうかもね」

メリー、田^トが笑つてない。
いや、浮氣はしないから、大丈夫なんだけどね。
まだ付き合つてないし。
確認はできなきけど。

出発前日、リントン呼び出された。もちろん、メリーにも同席して
もらひつ。

「コウサ君、これが頼まれていた虫籠だ。それとある貴族が噂を聞いて動くらしい。だからこの田立つ虫籠は渡したくないんだよ

虫籠は檻の形状をしており、丁寧に小さな扉もついている。
虫籠は木製であるが、銀細工や宝石が散りばめられており、人目を惹く。

「その貴族の事を教えてくれるつすか?」

「ゲース・ドンゲル伯爵。爵位こそシャイン様と同じ伯爵だが、人柄は比する事もないほど卑しい。ドンゲル伯爵は、昆虫標本のコレクターである」

そりやまたおあつらえ向きな奴が来てくれたな。多分、ドンゲル伯爵はならず者を使ってジュエルバタフライを奪いつもりだろう。

「シャイン様はまだブルーメンにいるんすか？」

「虫籠を預かつた時に君達の心配をしておられた」

「なら安心っす。予定変更になるっすが、明日シャイン様とミントさんに見送りお願いしたいっす。できるだけ目立つ格好でお願いするつすよ。それとこの手紙をお願いするつす」

「云々ておくけど、何か意味があるのかい？」

「細工は流々、仕上げを」覧じる。だよねつ「ウサ」

メリ一、それ俺が言いたかったのに。

出発当日

約束通りシャイン様はタキシード、ミントもドレスで来てくれた。

元々高名なシャイン様と最近噂になつてゐるミントが連れ立つて見送りをするとあってかなりの人だかりができる。そして俺はこれみよがしに派手な虫籠をぶら下げて旅立つた。

ザ・ハーミニーの準備（後書き）

子兔のくだりはピトフーイ様から頂きました

ザニアとメリーの旅 1似た者カップル（前書き）

今回の話で功哉&メリー・コンビにした意味を理解してもらえたなら幸
いです

ザノとメリーの旅 1似た者カップル

s i d e 功才

(メリー、後ろの男5人組をどう思つ?)

(服装は農夫っぽい服を着てるけど、絶対に違うよね)

(なんで、そう思つ?)

(あんなきれいな手をした農夫なんていないよ)

別に男達の手が白魚の手みたいに美しい訳ではない。
農家ならどうしても爪に土が入り黒くなるし、手も節くれだつ。
早い話が労働をしている手になる。

一方男達の手には濃い毛はあるが、豆もなく普段から仕事をしていないのが伺えた。

(しつかし、もう少し上手く尾行できないのか、俺達の歩速に、一々合わせてどうすんだよ)

功才達が急げば男達も急ぐ、功才達が立ち止まれば男達も立ち止まるの繰り返しであった。

(「ウサ、あの人達ばれてないって思つてるのかな?」)

(多分な。ドンゲル伯爵が自分の領地から連れて来た連中だろうから、俺達を見失えば即迷子だからあんな風になるんだる。つうか農

夫が野良着のまま、こんな遠出する訳ないつーの

(シャイン様の部下の爪の垢を飲ませてあげたいね)

メリーオの言つ通りシャインの部下も尾行をしていた。

尾行する相手は、功才達ではなく、ドンゲルの寄越した男達。シャインの部下は商人や農夫、町人に紛して功才とならず者を取り囲む様に移動している。

何人かは、途中で違う道に行き新たな扮装をしてくる徹底振りだ。

(もしかして、コウサの指示?)

(ああ、手紙でお願いしておいた。メリーオ、そろそろ小声は終わりだ。あいつら話が聞こえないからって距離を縮めてきた)

(りょーかい。それならあの話だね)

今回の旅はジュエルバタフライを捕まえる森まで往復6日の旅。仲の悪くない年頃の男女2人連れが、終始小声では怪しまれる。

「メリーオは、ジュエルバタフライを見た事あるんだよな? どんな蝶なんだ?」

「水晶みたいに真っ青な羽にエメラルドみたいな緑やルビーみたいに赤い斑点が混じってるんだよ」

「森の奥にしかいないんだろ?」

「やうだよ。獵師にしてみれば、そんなに珍しい蝶々じゃないんだけどね」

「早い話が熊や狼がでる場所にジュエルバタフライもいると」

「獵師の間では、ジュエルバタフライに会えて1人前の獵師って言葉があるくらいだからね。普通の人ならまず無理かな」

side シャイン

「それほど自然な会話だったのか」

「はつ。あらかじめ話を聞いていた我らでも、あれが演技とは思えませんでした」

「つまり、ドンゲル伯爵の部下達は森に入らずコウサ達が捕獲してきたジュエルバタフライを奪う企てをたてると」

「ええ、そのような話もしていました。わざわざ森に入らないでも、あのガキ達の捕まってきた蝶を奪えば済む。俺達みたいに要領よくやるのが賢い人間だ。と」

「やれやれ、既にコウサの罠に掛かっているとは知らずに香氣なのだな。ミント、本当は一緒に行きたかったんじゃないか?」

シャインが後ろに控えていたミントに、からかう様に話し掛けた。

「無理ですよ。僕はあの2人みたいに上手な演技はできません」

この時2人は、自分達もコウサとメリーの悪戯にはめられているとは

知る由もなかつた。

s.i.d.e 功才

無事に夜が来る前に街道沿いの村に辿り着く事ができた。

「口ウサ、今田は宿に止まるの？」

「うんにゃ、この村の村長の家に泊まれる様にシャイン様にお願いしてある」

「わざわざシャイン様にお願いしたの？」

「詳しい話は、村長の家についてからするよ」
シャイン様から紹介とあり、村長宅での歓待は中々のものだつた。

s.i.d.e メリー

食事を終えて、やつと口ウサと二人つきりになれた。

「まさか、この歓待を受けたくてシャイン様にお願いしたんじゃないよね？」

「それこそまさかだよ。宿屋に泊まつたら常にあいつ等を警戒しなきゃいけないから、打ち合わせもできないだろ？それにほらつ」

口ウサの指差す先には尾行して来た男の姿がある。

「あいつ等は俺達がいつ出発するか分からぬから常に見張つてな

きやいけないんだよ。酒も飲めないし、頭以外はぐっすり寝れないから部下はさぞかし不満がたまるだらうな」

「明日の出発は早朝？」

「そうだよ。頭だけ熟睡したんじゃ不公平だしな。頭もこんな早い時間からは寝れないだらうし。明日は少し早起きしてやるか。途中の村を一つスルーするつもりだから」

尾行してる人達にしてみれば、やつと休めると思つた村をどうされるのはショックだよね。

「だから村長様の奥様から、あんなにパンをもらつていたんだ」

「お世話なつたうえに、早起きまでさせひや迷惑だろ？それとメリ一森に毒草とか危険な蜂とかはいる？」

「やつやこのけど。また何か企んでるの？」

いひつて、私とマサの初お泊まりは早寝で終わってしまった。

ザ「」とメリーの旅 1似た者カップル（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコのサバイバル 先生はメリー（前書き）

お気に入り登録が2千件を超えるました。

曹仁伝ではどうしても越せなかつた1,500を超えての2千超えが嬉しくて次話書き上げました。

曹仁伝を読んでくれた人は男の人が多くたけびザコはどうなんでしょうか？

どちらにしろ、この駄文を楽しみにしてくれている人がいるなら感謝です。

ザコのサバイバル 先生はメリー

side メリー

ほつほうの体つて、あーゆーのを言つんだうつな。

ぐつすりと眠れた私達と違つて尾行をしている男の人達は疲れ果てていた。

そりやねー、早朝から午後まで早歩きしたら疲れるよね。

私達や荷物には、コウサのライトウェポンって魔法が、掛かっているお陰で余り疲れではないけど。

昼ぐらいに着いた村を通り過ぎた時の男の人達の悲痛さには少しだけ同情しちゃった。

「ねえ、コウサ。昼に食べた、あのサンドイッチって食べ物。美味しいかつたから、今度はゆっくり座つて食べたいな」

せっかくのコウサの手料理も、早歩きしながら食べたから、きちんと味わえなかつたんだよ。

side 功才

「サンドイッチは料理に入るのか?ビツセ作るんなら、もう少し手のこんだ料理を作るよ」

「へー、コウサって料理できるんだ」

「お前は結婚できない可能性が高いからつて、婆ちゃんに仕込まれたんだよ。メリーディンな料理が好きなんだ?こっちの材料で作れそ

うな料理があつたら今度作るよ」

「じゃ。メリーが何か獲物を捕まえて捌くから、それで何か作つて

メリーは名案と、ばかりに胸の前でポンッと手を叩いた。

仕草は可愛いんだけど、話の内容がワイルド過ぎ。

「こ」のペースだと次の村には早めに着くから、詳しい話はそこです
るか」

できたらジビエ料理は避けたい。

次の日

「こ」だよ。この森にジユエルバタフライがいるんだよ。懐かしい
なー」

メリーは昔、父親との森で猟をした事があったそうだ。

そのせいか、メリーの狩獵魂に火がついたらしく気合に満点。

「行くよつコウサ。森の中では人の小賢しい知恵なんて通用しない
んだからね。わかつた?！」

いや、その小賢しい知恵がないと俺は役立たずなんだけど。

「わかつたら返事つ！」

「はいっ！…あつ待つて。入り口に田畠をつけとくか」

道無き道をサクサク進んでメリー。

まつまづの体で着いてく俺。

「メリー、もう少しゅうへりと進まない？」

「却下。森の中で夜を明かすのは凄い危険なんだよ。それに日の落ちた森は獣達の天国なんだからね」「ね」

昼の森はメリーの天国と。

「コウサ、頭を低くして。ハト蜂の巣があるから」

雀蜂の倍以上の大きさがあるからハト蜂なんだね。

データボール参照

ハト蜂は、とっても危険な蜂なんですよ。

毒性は低いんですけど針が太くて刺されたらヤバいですよ。
オーディヌスには、ハト蜂に豆鉄砲を食らわす勇気なんて言葉もあるんですよ。

ロッキの今日から使えるオーディヌスの諺より

「う一時間がなくて残念。ハト蜂の幼虫とか蜂蜜は、すうじい美味しいんだよ。コウサに食べさせてあげたかったのにな」

「やうなの？でも時間がないなら仕方ないよね。うん残念だ、残念。
さつ行こう」

メリーは名残惜しそうにハト蜂の巣を見ているけど、蜂蜜はともかく巨大幼虫は食いたくない。

.....

そして3時間くらい歩いたらどうが、メリーが急に立ち止まつた。

「ほりつコウサ。あれがジュエルバタフライだよ」

メリーの指差す先には、木漏れ日の中を数匹の蝶が飛んでいる。木漏れ日に反射してジュエルバタフライの宝石の様な羽が煌めいてた。

「凄い。神秘的だよな」

「でしょ。でもどうやって捕まえるの？コウサ虫取り網持つてないよね」

「大丈夫だよ。シールドボール」

ジュエルバタフライに、シールドボールをかけて虫籠に入れてマジックキャンセルを掛ける。

予定通り一匹を確保。

「さて、それじゃ例の物を探しますか」

そう言つて、歩きだそうとした瞬間、メリーに耳を引っ張られた。

「森の中で素人が勝手に歩かない事。わかつた？」

「はいっ。わかりましたっ」

色々な意味で、早く森から出たい。

「ほら、コウサこれが探していたモノだよ。普通の人は、先ず見つけれないんだから」

「確かにこれを森に詳しくない人間が見つけるのは不可能だよな。ありがとなメリー」

「へつへー。さつ戻る」

来た道を正確に戻つていくメリー。

途中でキノコやら果実を探集していくメリー。

途中で現れた兎を、捕獲者の目でガン見するメリー。

兎に逃げろっ！と心の中でお願いする俺。

パーソナルカードのメリーの職業はレンジャーに変わったと思つ。

「メリー、もうすぐ出口だよな。先頭代わるよ。もしもの場合は打ち合わせ通り頼むよ」

えつ、ここからが俺の出番だ。

待ち人来る。

例の5人組が入り口で待ち伏せしていた。

「わざわざ田印を残していくつてくれてありがとな。さあ坊主達。怪我をしたくなきや、その虫籠をよこしな」

「有料で引き取るつて取り引きはなしつすか?」

「取り引きだ?この人数相手に取り引きを持ち出すとは良い根性してるな。そんなに死体になりたいのか」

「死体は嫌つすね。それでいくらで買つてくれるつすか?今ならシヤイン様ヘジュエルバタフライは一匹もいなかつたつていう報告書付きつすよ」

「このガキしつかりしてら。一万デュクセン払つてやる。虫籠をよこしな」

「金が先つすよ」

「仕方ねえな。ほれつ」

男は俺の足元に金を投げつけてきた。棒に虫籠をくぐつつけて男に渡す。

「さあ虫籠をもらつたりまへば、いっしのものだ。金もその姉ちゃんも俺達がいただいてやる」

「は、話が違うつすよ」

「はつ、誰も身の安全は保証しないぜ?まつお姉ちゃんの方は、

たっぷりと可愛がつてやるけどな

俺は下卑た笑いを浮かべる男を見て、笑いを堪えるのに必死だった。食つてのは、事前に幾重にも張り巡らせておくもんだぜ。

「メリー逃げるつすよ」

例の場所までね。

「ちつ、小僧は殺しちまえ、女は宿屋に連れて來い。俺は旦那に蝶を届けてくる」

今日、散々森を歩いてきた功才と初めて森に入る男達では、移動速度の差がどうしてもでてしまう。

その所為で男達は歩くのに必死で功才に誘導されているとは気づけないでいた。

男達を確認して功才がゆっくりと振り返る。その顔には珍しく怒りの感情が表れていた。

「大人しく取り引きを終えてりや良かつたのによ。俺の大切なメリ一に手をだそうとしたお前達が悪いんだぜ。メリー頼む」

今の功才に男達に言い訳をさせる優しさは残っていない。

メリ一が弓で落としたのは、ハト蜂の巣。

功才が男達を誘導したのはハト蜂の巣の真下。

功才がそれを発動させるのはハト蜂の巣と男達が重なりあつた瞬間。

「シールドボール」

人数が人数なだけに、何時もより巨大なシールドボールではあったが、男達に逃げ場は存在せずに大量のハト蜂を相手に身を縮こまらせるのが精一杯の抵抗であった。

「マジックキャンセル」

毒性こそ低いものの、威力は抜群のハト蜂の針の痛みから逃れようと走り出す男達。

それを追い掛けるハト蜂。

「さつ、ハト蜂がいないのを確認したら俺達も帰るか」

「コウサ、あれにシールドボールをかけてお願い」

シールドボールをかけられたハト蜂の巣を笑顔で抱えるメリー。

「コウサ凄いよ。こんな大きい巣が捕れたらメリーの家ではお祭り騒ぎだよ。幼虫も沢山入ってるし良かつたねコウサ」

サバイバルの締めに昆虫食を体験させられた功才であった。

ザコのサバイバル 先生はメリー（後書き）

ジュエルバタフライ編はまだ続きます。
いつもと少し違うザコはどうでしたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606x/>

ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

2011年10月10日05時11分発行